

'94・天山山脈トムール峰

登山隊報告書

天山登山俱樂部

トムール峰登山隊

'94・天山山脉トム一儿峰

登山隊報告書



天山登山俱樂部

トム一儿峰登山隊

— 目 次 —

はじめに	1
隊員紹介	3
第1章 遠征の概要	7
○ 遠征の概要	8
○ ムスターグ・アタ峰の概要	9
○ トムール峰の概要	10
○ 行動の概要	11
第2章 遠征準備	13
○ 出発までの経緯	14
○ 戦 略	15
第3章 行動記録	17
○ 行動記録	18
1. ムスターグ・アタ高度順化	18
2. トムール峰への挑戦	30
○ 登降図	43
第4章 担当報告	45
1. 装 備	46
2. 食 糧	49
3. 医 療	52
4. 輸 送	54
5. 渉 外	56
6. 会 計	57
第5章 隊員エッセイ	59
第6章 遠征を終えて	63
資料編	69
協力者名簿	75
編集後記	76

はじめに

中国新疆ウイグル自治区とキルギスタン共和国との国境にある天山山脈の最高峰が、ウイグル語で「トムール」（鉄の山）と呼ばれる巨大な山塊です。

私たちが一昨年この山を目指したのは、3人の仲間を雪崩で失った1990年の夏と、同じく雪崩で敗退した92年に次いで3回目でした。過去2度の遠征でいずれも登頂を果たせなかった私たちの心はずっと、悔しさと意地と、己に対する妙な義務感とに支配され、それが今回の計画を実現させる原動力となったことは否定できません。

私たちは、「3度目の正直」という言葉はまさに自分のためであると信じていました。しかしそんな確信も、トムール峰の圧倒的な存在感と威圧感を前にして無残にも砕け散りました。今の私たちの前には、3度目の遠征も失敗に終わったという重すぎる現実のみが突きつけられています。

3ヶ月という長期の遠征期間を設定したうえで、練りに練った戦略・計画は、「非のうちどころがない」と自負していました。また、その計画を支える各隊員の意気込みも充分にあったはずでした。

それでも登頂できなかった原因は、つきつめると私たち個人の力量不足にあったと考えざるを得ません。どんなにすばらしい計画を立てても、それを実行する人間の能力を過大評価したうえでのプランならば、絵にかいた餅にすぎないということを思い知らされました。

私たちが4人という少人数で、しかも天候不順という悪条件のなかでトムール峰に登頂するには、個々人の肉体的・精神的な能力が少しずつ不足していました。加えて、今回の私たちには「慎重さ」という名の弱さがあり、それが足かせとなって数少ないチャンスを逃したことは否定できません。

困難な山に挑むさいに、「無事全員帰ってくるのが最も大切なことで、一番の目的である」、という言葉をよく耳にします。私たちは今回の遠征で、この一点のみは果たせました。しかし登頂はおろか、成果らしい成果が何も得ら

れなかった3ヶ月間の遠征に対して、しかも3度目の遠征にもかかわらず結果をだせなかった事実に対して、「全員無事下山した」という評価は何の慰めにも自己正当化にもなり得ません。

この小冊子は一応遠征隊の報告書として作成しましたが、上に記した反省点を掘り下げるための一手段として、関係の皆様から忌憚のないご意見をいただければ幸いです。

最後に、今回の遠征にご協力いただきました皆様に心より御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

1996年 5月31日

天山登攀倶楽部 トムール峰登山隊隊長

吉田 宣明

隊員紹介

(1. 遠征当時の年齢 職業 2. 担当 3. 所属 4. エピソード)

● 吉田 宣明

1. 29才 会社員
2. 隊長・医療
3. 横浜市大山岳部OB 日本山岳会
4. 隊員中、随一の体力、技術、経験を誇る彼は、入山早



々、お尻にできものができるというアクシデントに見舞われた。そのつらさを苦渋に満ちた表情で語り、吹雪の中治療のためカシュガルへと下っていく後ろ姿は、哀れを誘った。思えば90年のトムール隊で、同じ症状に陥ったN氏をさんざんバカにしていたのは彼だった。

時に高校生に間違われるほどの童顔とともに、天下一品の口うるささは一向に衰えを見せず、今回もその被害者がでた。臨床工学士の資格を持ち、高所医学学会のメンバーでもある彼の医学知識はちょっとしたもので、同時期に入山していたカシカール隊に病人がでたさいに、ABCよりトランシーバ一越しに下した的確な指示は、天より下る神の声のように聞かれたという。

● 吉見 敦司

1. 24才 無職
2. 装備・食糧
3. 横浜市立大学山岳部、探検部OB
4. 前回遠征の屈辱をバネに、帰国後憑かれたように山行



を重ね雪辱に燃えていた吉見だったが、今回は天候不良と他の隊員の不調に足を引っ張られ、登頂は果たせなかった。自他ともに認めるいい加減な性格で、ムスターグ・アタではナイロンガッパをはいたまま登頂するなど、彼の無謀さを物語るエピソードは数多い。

大学を卒業後、定職につかないまま遠征に参加した彼は、下山後は帰国せずにパキスタンから陸路ヨーロッパを目指した。しかし、ようやく入国したイランで肝炎と感染性の下痢を患い強制送還された。発病の原因は、3ヶ月にわたる高所での滞在で内臓が弱っているところに、パキスタンの安食堂でだされた水を、何の警戒心もなしにガブのみしていたためだと噂されている。

● 中里 雄一

1. 23才 学生
2. 食糧・記録
3. CMC、YCC、日本山岳会
4. 吉田との日本山岳会でのつきあいを通じて、遠征に参



加してきた。亜細亜大学に登山の一芸入試で合格し、「マッターホルン北壁単独登攀」、「90kgの巨体でフリーの難ルートをこなす」など前評判は非常に高かった。しかし、巨体に似合わない登攀テクニックを誇る彼も、高所登山は勝手が違ったらしく、ふれこみどおりの実力は発揮できなかったようである。

BCでのコックとしての腕前はかなりのもので、ギョウザやお好み焼きなど、限られた食材を駆使していろいろな料理のバリエーションを楽しませてくれた。また、カシカール隊の病人を搬出するさいには、持ち前のパワーでモレーン地帯をかつぎおろすなど、登山活動以外での彼の活躍ぶりは特筆すべきであろう。

● 田村 康一

1. 27才 無職
2. 渉外 輸送 会計
3. 横浜市大探検部、山岳部OB
4. 三年半勤めた会社を辞め、「住所不定、無職」という



身分で遠征に参加。捨てるものはなにもないと意気込んだが、ムスターグ・アタで下山中、クレバスにはまって膝を痛め、トムールではBCキーパーとなる。BCでは遊び相手がいないため、食用に連れてきたヤギをかわいがり(=いじめる)、しまいには情が移って、中国側スタッフに筆談で、「ヤギを殺さないでくれ！アイツはオレの朋友なんだ！」と、涙ながらに哀願するほどであった。

遠征終了後、標的を女性へと軌道修正し、パキスタンを矢のような速さで駆け抜け、女友だちの待つカトマンズへ急いだ。

ぐうたら隊長のもと、登山隊につきまとう渉外作業をほとんどひとりでこなし、その切れ味鋭い手腕は、周囲から高い評価を得ている。

● 胡峰嶺

1. 37才 シシカバブー屋
2. 連絡官
3. シボ族 新疆登山協会(監督)
4. 前回の遠征時も連絡官を務めてくれた、陽気で気のい



いアニキといった男である。自分と風貌が似ているせいか、中里をかわいがり、「雄一はオレの弟分だ」とよく言っていた。95年に中国・台湾合同のムスターグ・アタ登山隊の隊長を務めるということで、その偵察のため、我々といっしょに登ることになる。初めはどこまでやるのか半信半疑だったが、ビバークしてまでその頂上をおとすという執念をみせた。だが、その間は本来の仕事である連絡官という任務を、全く放棄していたことになる。

彼は新疆登山界の英雄だそうで(崑崙のウルグ・ムスターグ峰に初登頂している)、彼の登頂は地元の新聞に大きく報じられた。ただ、その記事にはなぜか我々のことを、「胡峰嶺率いる日本登山隊・・・」と紹介してあったが....。

● 史明

1. 27才 新疆草原研究所
2. 通訳
3. 漢族
4. 新婚ホヤホヤにもかかわらず、女性を見ると口説き始



め、アクスのディスコでも美人のホステスに囲まれて鼻の下をのぼしていた。彼を黙らせるには、「女といっしょの写真を奥さんに送りつけるぞ！」という言葉が非常に効果的であった。

彼の通訳としての経験はまだ浅いようで、彼の通訳を介するより筆談のほうが早くスムーズなほどであった。彼に疲れが見え始め、我々が貧乏隊ということもあって、トムールのキャラバンの前に辞めてもらった。そのため我々は、いままで怠けていた中国語の勉強を余儀なくされたが、おかげでそのレベルは飛躍的に向上するという皮肉な結果を生んだ。

● 胡天山

1. アクスバザールのコック
2. コック
3. 漢族
4. トムールでの中国側スタッフ用コック。普段はアクス



のバザールで店を開いており、なかなかの腕前。美人の奥さんとかわいい坊やが、しばしの別れを惜しんで2100mのタカラク牧場まで見送りにきた。

奥さんが四川省出身だそうで、その影響からか辛目の味付けをするが、彼の作ってくれたポロ(ウイグル風炊き込みご飯)や肉まんの色は忘れられない。

● ケンジ

1. 天山山麓の牧民
2. 馬方
3. キルギス族
4. トムールに行く度に必ずお世話になっている馬方、と



いうより我々の数年来にわたる友人といったほうが正確であろう。BCまでの道を知りつくしており、モレーンでのルート・ファインディングの巧みさは見事なものである。遠征期間中、骨身を惜しまずほんとうによく働いてくれて、我々の全幅の信頼を得ている。

下山後、彼の自宅に立ち寄り酒宴となったが、普段から陽気な彼が酔うとさらに陽気になり、誰彼かまわずのチュー攻撃をおみまいしていた。

● トウディ

1. 天山山麓の牧民
2. 馬頭
3. ウイグル族
4. タカラクの集落ではかなりの権力者のようで、彼の一



声で何人かの馬方がクビになったほどであった。いつもは寡黙だが、たまにボソッと言う冗談で笑わせてくれた。

しかしそんな彼も、キャラバン中は馬に乗らない(その分荷が背負えなくなるので)という約束を破って吉田になじられ、隊の分配品(ハイピースート)まで取り上げられて、馬頭としての面目を失ってしまった。

第1章 遠征の概要



遠征の概要

遠征期間：1994年 6月1日～ 8月27日（88日間）

地域：中華人民共和国新疆ウイグル自治区・パミール高原および天山山脈

目的：天山山脈最高峰、トムール峰(7,435m)南面中国側からの登頂。

予算：450万円（隊員負担金 360万円、寄付金等90万円）

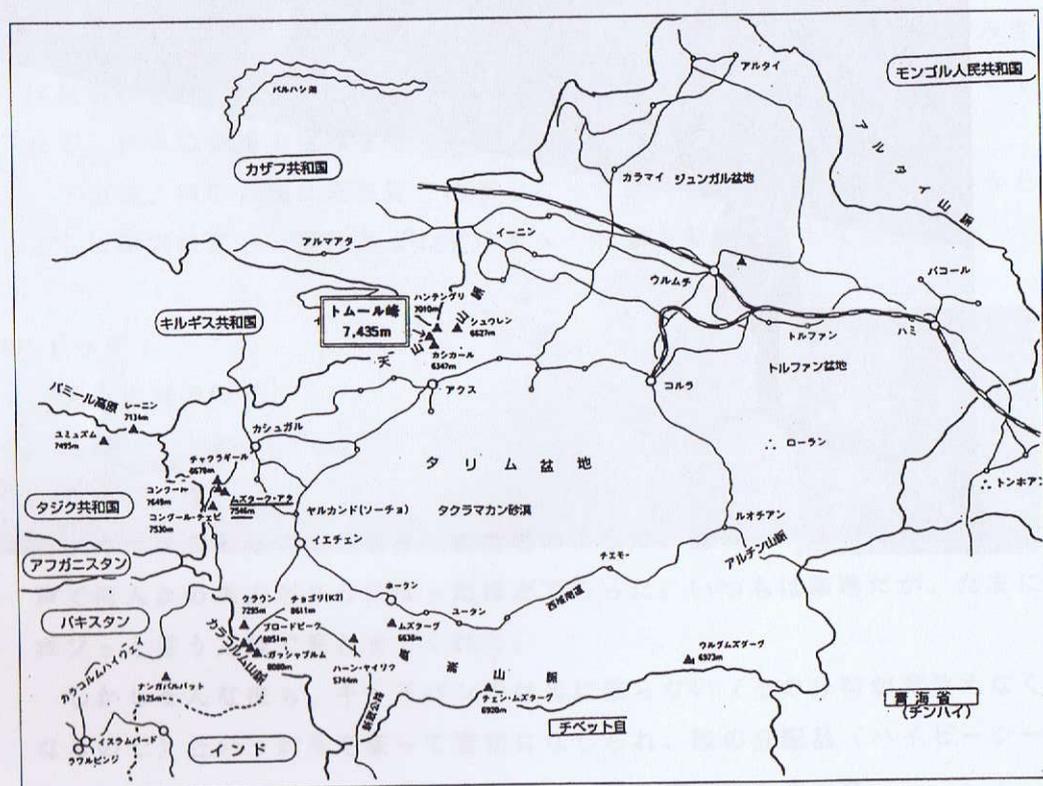
戦略：パミール高原ムスターグ・アタ（7,546m）で1ヶ月間高度順化トレーニングをおこない、雪崩の多いトムールの頂上を短期速攻のセミアルパインスタイルで狙う。

結果：7/1、ムスターグ・アタ峰登頂（吉見敦司）。

8/13、トムール峰登頂断念。

敗因：高温のため天山山脈の氷河が解け、沢が増水して徒渉できず、キャラバンが遅れた。そのため、天候が安定した7月中の登頂を逃した。8月になると連日のように降雪に見舞われ、雪崩が頻発した。

また、隊員の病気や負傷で常時2パーティを組めなかった。トムールの後半は1パーティしか機能せず、僅かな好天をつかめなかった。



中国西部位置図

ムスターグ・アタ峰の概要

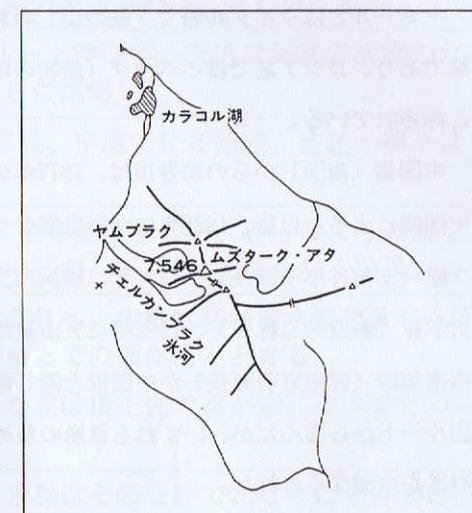
ムスターグ・アタ峰は海拔7546m、新疆ウイグル自治区内のパミール高原にあり、付近のコングール（7719m）、コングール・チュビエ（7595m）と共に、7千5百メートルを超える高山地帯を形成している。

この山の初登頂は1956年 7月13日、中ソ合同隊によって成し遂げられた。

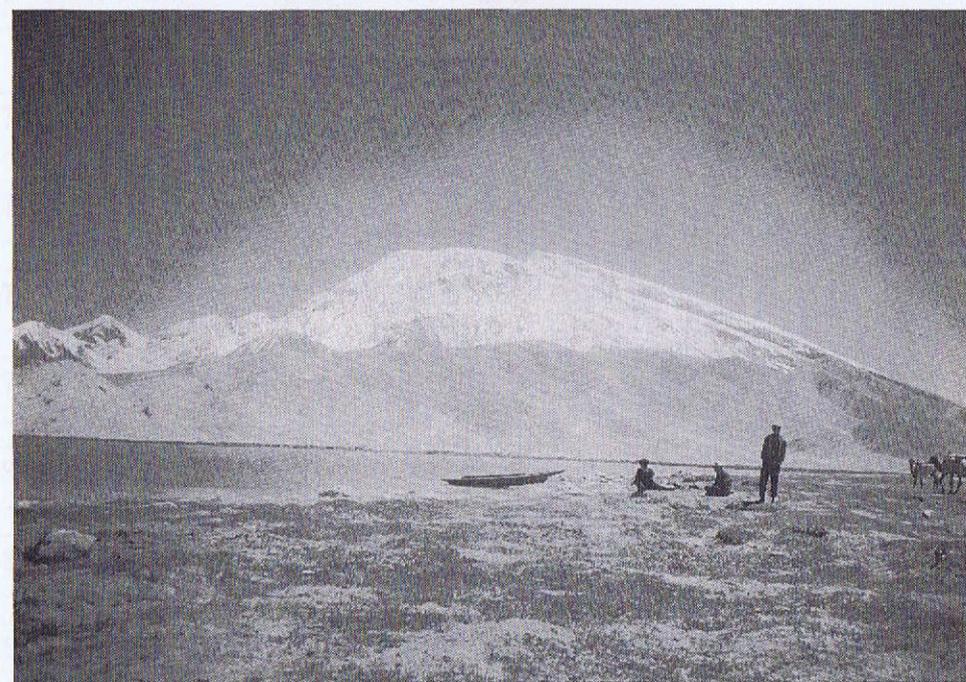
ムスターグ・アタとはウイグル語で「氷山の父」の意味であるが、緩やかで女性的な山容をもち、一般ルートからの登山にはスキーが有効である。

カシュガルから車と徒歩で2日間というアプローチのしやすさと、比較的容易なルートから人気が高く、毎年7～8月には数多くの登山隊が訪れている。

ただし、公称値7546mの標高は眉唾ものであり、カシュガル登山協会によると、「せいぜい7200～7300m」ということらしい。



ムスターグ・アタ概念図



カラクリ湖からのムスターグ・アタ峰

トムール峰の概要

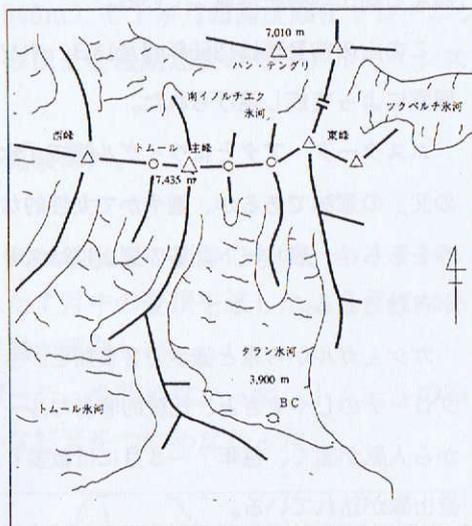
トムール峰（7435m）は天山山脈の最高峰、中国と旧ソ連邦のキルギスタン共和国の国境稜線上に位置する。

トムールとはウイグル語で「鉄の山」の意味であり、ロシア名ではポペーダ（勝利の峰）と称されている。

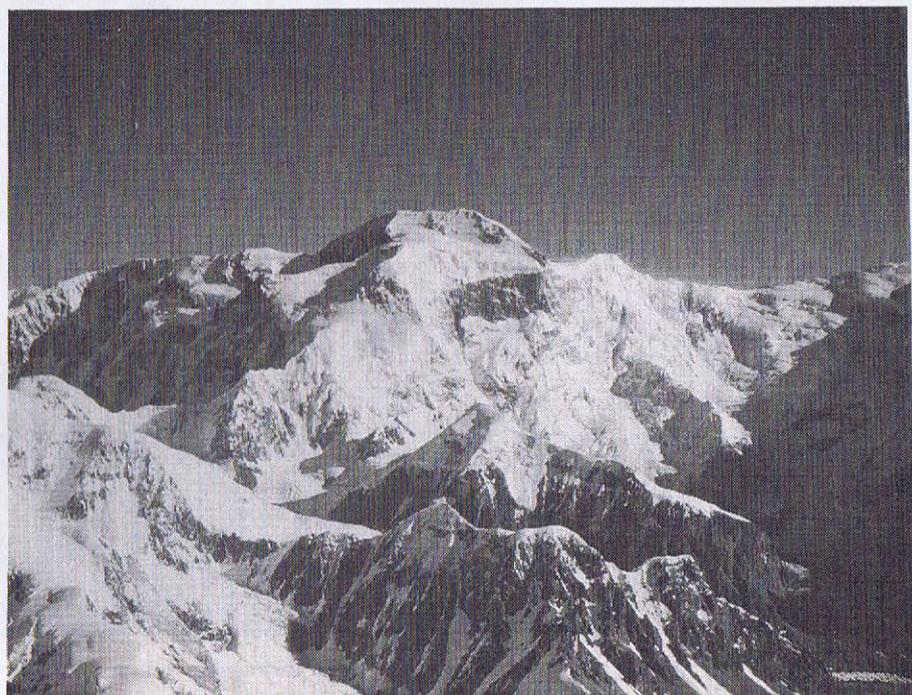
中国側（南面）からの初登頂は、1977年の中国隊による。以後、1986年に女子登攀クラブ隊（田部井淳子隊長）、1990年に横浜市立大学隊（西堀秀二隊長）、1992年に天山登攀倶楽部隊（吉田宣明隊長）が中国隊と同じ南面ルートから挑んだが、いずれも雪崩のため撤退を余儀なくされた。

特に1990年の横浜市大隊では、標高5800mのC3で西堀隊長他2名が雪崩に遭い、行方不明となったまま今日に至っている。

初登頂した中国隊や地元の牧民の話では、「7月～8月上旬の天気が比較的安定している」ということで、上記の隊はいずれもその時期に登山活動を行っている。



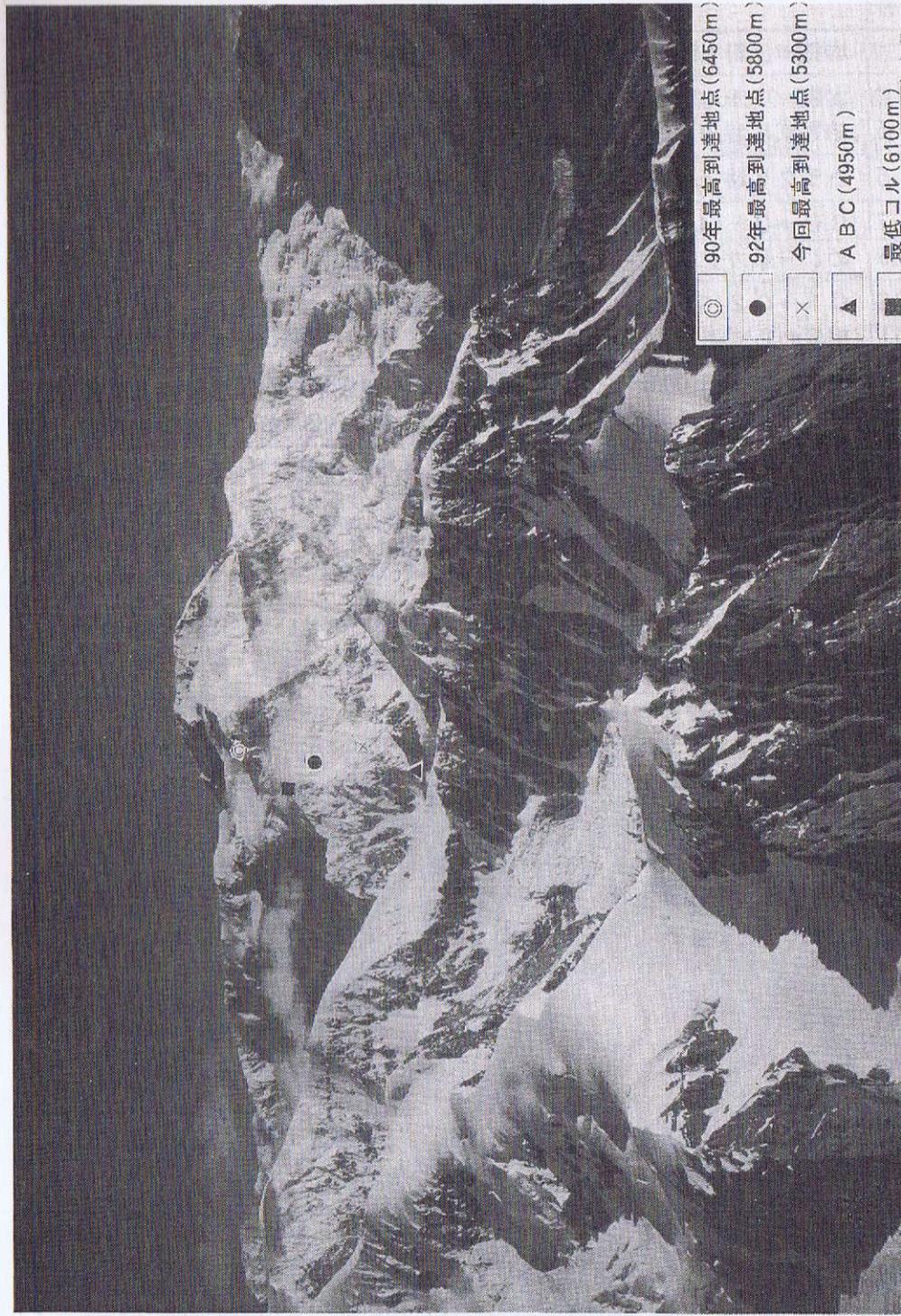
トムール概念図



カシカール峰山頂からのトムール（山岡仁志氏提供）

行動の概要

日付	主な出来事
6/1	成田→上海：市大探検部、神奈川県山岳部大学連メンバーらの見送り。
6/2 ～5	上海→ウルムチ→カシュガル→カラクリ湖：カシュガルではウイグル族の結婚式に参加し、オープンカーで町中をパレードする。
6/6	カラクリ湖→ムスターグABC：ラクダ6頭のキャラバン。BCは4,200m。
6/7 ～15	BC→C1(4,900m)：天気悪く、ルート伸びず。吉田は痔漏の治療のため、一旦カシュガルに下山する(13日に復帰)。
6/16 ～21	C1→C2(5,600m)：天候回復し吉見、中里でC2建設。吉田の調子は相変わらず悪い。
6/22 ～25	C2→C3(6,000m)：中里、胡でC3を建設するが、思ったより高度を稼げず。25日に最初のアタックをかけるが、6,200mであえなく敗退。
6/26 ～30	吉見、胡は第2次アタックへ向けてC3へ。中里は軽い肺水腫でBCへ下山し、吉田は6,000m、田村は5,600mまでの順化にとどまる。
7/1	20時過ぎ、吉見が単独登頂。同行した胡は頂上まで届かず、途中でビバークとなる。
7/2	23時頃、登頂した胡がC3に戻る。吉見はそのせいで、C3にくぎづけ。
7/4	上部キャンプ及びBCを撤収し、カシュガルへ下山。
7/6 ～8	カシュガル→アクス→タカラク牧場 アクスではカラオケで息抜きするが、ムスターグ・アタで披露困憊の通訳が脱落、ウルムチに帰るはめとなる。
7/9 ～17	高温による氷河融解や大雨のため、キャラバンは予定の3日間を大幅に超過し、9日間を要する。田村は膝を悪化させ、以後戦線離脱。
7/18 ～20	BC→C1(4,600m)：キャラバンの遅れを取り戻すかのように、速攻でC1建設。一昨年手こずったアイスフォールもなんなく突破する。
7/21 ～26	C1→ABC(4,950m)：雪壁の基部にABC建設。26日には雪壁を偵察し、翌日からのアタックに備える。
7/26 ～8/1	吉田、吉見はABCから一気の登頂を狙うが、降雪が続き停滞を強いられる。8/1にようやく雪壁にとりつくが、吉田の不調で下山。
8/2 ～5	吉田は数日の休養を経て、8/5に再度アタックへ向かうが、肺の痛みを訴えBCに下山。以後戦線離脱する。
8/7 ～13	吉見は中里を伴い、2度目のアタックを試みる。しかし降雪が続き、8/12、8/13と雪壁の突破を試みるものの、雪崩の危険性が大きく登頂断念。
8/17 ～22	BCを撤収しアクスへ。途中馬方の反乱にあい、登山協会の張氏が拉致・監禁される。アクスで隊は解散し、帰国組とパキスタン行組に分かれる。



トムール峰核心部ルード

第2章 遠征準備



出発までの経緯

吉見敦司・田村康一

1. 遠征時期の決定

1992年8月、2度目のトムール遠征に失敗した吉田と吉見は、次回の再々チャレンジに向けて、帰国後精力的に山行を重ねていた。一方、報告書の編集等、隊の残務処理と遠征でこしらえた借金の返済に負われていた田村は、1年近く山から遠ざかっていた。

1993年6月、吉田と吉見、2人の山仲間であった亜細亜大の中里、田村の4人が集まり、翌94年に3度目の遠征を実行するか否かの会合をおこなった。当時大学在籍5年目だった吉見と中里は、遠征のため卒業後の進路を保留にしているという事情により、来年夏の計画実現に強い意欲を示した。一方田村は、自らのトレーニング及び資金面での準備不足から、しばらく猶予期間をおいたうえで再々チャレンジを主張した。

結局、当初93年中に予定していた結婚が延期となった吉田の、「これが(独身時代)最後の遠征」というセリフが決め手となり、3度目のトムール遠征を1994年夏に行うことが決定した。

2. 事前トレーニング

遠征終了後に結婚を控えた吉田、遠征を機に勤務先を退職することになった田村は出発前も何かと忙しく、4人揃っての訓練合宿はなかなかめななかった。そこで遠征期間を3ヶ月間とり、最初の1ヶ月をトレーニングと

高度順化を兼ねた、ムスターグ・アタ登山にあてるという計画を立てた。国内での合宿は専ら、吉田・田村、吉見・中里の2パーティに分かれて実施した。

しかし、中国への出発を1ヶ月後に控えた1994年4月下旬、槍ヶ岳の硫黄尾根で合宿を行っていた吉見・中里パーティが事故を起こした。中里が尾根上から谷に滑落して動けなくなり、ヘリコプターで救助されるという失態を演じたのだ。(この模様は翌95年の正月に、『山岳救助隊の特集』としてテレビ中継されたらしい。)

幸い、中里の怪我はなんとか回復し、6月1日には成田空港から中国へ向けて、無事4人で出発することができた。

■ 主な訓練山行

1993年4月 槍ヶ岳北鎌尾根
5月 剣岳剣尾根R4
6月 穂高屏風岩東稜
8月 北ア笠ヶ岳～五竜岳
9月 谷川岳一の倉沢衝立岩
12月 鹿島槍ヶ岳天狗尾根
1994年1月 八ヶ岳小同心
2月 南ア荒川出合ルンゼ
4月 槍ヶ岳硫黄尾根
5月 富士山

戦略

吉田 宣明

トムール峰登頂を目指す戦略を立てる上で、私たちにはまず、いくつかの条件というか制約のようなものがあつた。

その1つは、今回の遠征が3度目であり、過去2回ともに雪崩を受けており、尚かつ行方不明者をだしているため、遠征参加者が4人という少人数になったことである。

2つめは、核心部の雪壁を越えた6450m地点から頂上までのルートが、私たちにとって全く未知であるということである。

3つめは、隊員それぞれの都合により、まとまったのトレーニング山行がほとんどできないため、コンディショニング、体力作り等を個人の自由意志に任せるという点である。

この3点をふまえて登頂計画を練るのだが、成否のポイントは前回同様、標高5000～6000mあたりに広がる緩雪壁の通過と考えた。緩雪壁通過のポイントは、以下のとおりである。

- ① 1往復を限度とする。
 - ② 5000mの雪壁基部から、雪壁を抜けた6100mの最低コルまでの雪壁内では幕営はしない。
 - ③ 天候や雪面の安定した時期に通過する。
- これにより、導かれる登山活動の基本方針は、
- ・5000mより上部はアルパインスタイルで一気に頂上を狙う。
 - ・6000m強の高度順化を6月に別の山で行う。
 - ・過去2回の遠征以上に、装備の軽量化を図る。
 - ・8月以降の天候の悪化と高所での消耗を防ぐため、BC～5000mまでの往復も含めた登山活動は、極力短期間で終わらせる。

等である。

なお、高度順化用の山は、6000m以上の標高を持ち、なおかつトムール峰の

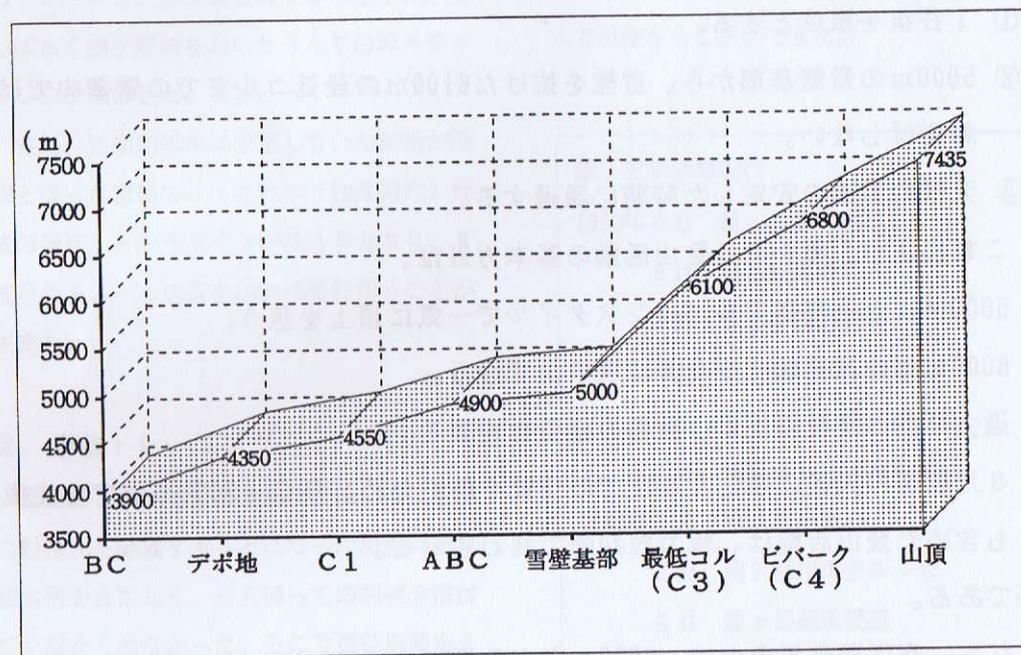
BCまでの移動を2週間以内に行えるというのが設定条件である。

以上より、私たちは以下の方法でトムール峰の登頂を目指すことにした。

- 高度順化トレーニングを、パミール高原のムスターグ・アタ峰で行い、6月中に全員が6000m強までの順化を行う。
- トムールの登山期間は7月中とし、C1、ABCの2つのキャンプ設営後、5000mより上部はアルパインスタイルをとる。
- 4人を2人1組に分け、ルート工作等での時間のロスを少なくする。
- 緩雪壁通過は、降雪中はもちろん、雪の不安定な時期を避ける。

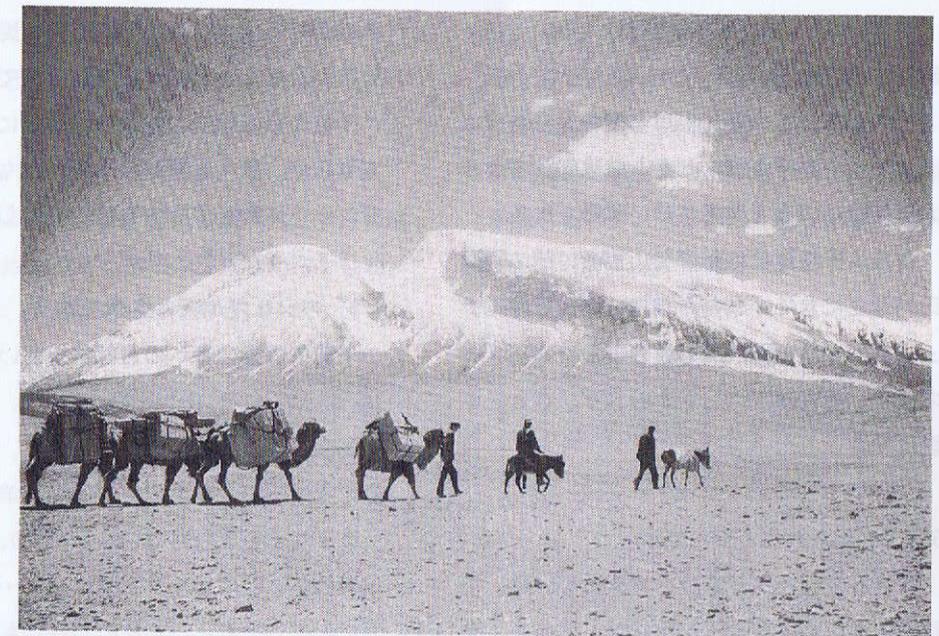
なお、第1回目の遠征の最高到達地点である6450mから頂上までのルートは、1977年に初登頂した中国隊の話から、技術的問題はない（傾斜の緩い稜線歩き）が、ラッセル等の体力を要すると予想された。

したがって、緩雪壁を突破して6100mの最低コルに抜けた後は、6700~6800m付近で1ビバークし、それから頂上アタックを行うというのが今回我々が立てた戦略である。



トムール峰登頂計画概念図

第3章 行動記録



行動記録

1. ムスターグ・アタ高度順化

6/1 成田→上海

成田空港では、市大の探検部、神奈川県大学山岳連盟のメンバー、吉田の婚約者、中里の彼女といった総勢30名を越える人々に見送られ、一路上海へ。

上海市内はいたるところで道路やビルの建設工事をおこなっており、道路は大渋滞である。本日の宿泊先である上海オリンピック倶楽部のサービスは最悪で、食事は2~3皿で打ち止め、皆空腹を抱えたまま怒り狂って就寝。

6/2 上海→ウルムチ

ウルムチ行きは飛行機は年期の入ったアエロフロートの中古機、しかも北京経由でウルムチ到着は深夜と非常に辛い移動となる。

ウルムチ空港には新疆登山協会の胡・劉両氏が迎えにきてくれた。市内の華僑賓館にチェックインした後、街の屋台でシシカバブーの夕食。就寝前にもかかわらず、吉見と中里は10本以上たいらげた。

6/3 ウルムチ→カシュガル

昨夜シシカバブーを食べすぎたせい、吉見と中里は朝食を食べなかった。午前中、登山協会副主席の苑先生に挨拶と今後のスケジュール等の確認に行く。

昨日は「下痢で空港に迎えにいけなかった」という通訳の史明史と合流し、彼の身重の奥さんに見送られてウルムチ空港を立つ。

カシュガルのホテルでは、ウイグル族の民族舞踊(?)による歓迎を受けた。この町は

ほとんどがウイグル族などの少数民族で、エキゾチックな趣がある。

6/4 カシュガル

ホテルで朝食後、中里と吉見はカシュガル登山協会通訳の趙氏とバザールへ買い出しに行く。バザールには、様々な野菜が彩りあざやかに並んでおり、活気に満ちている。趙氏の知り合いに野菜のリストを渡して、買っておいてもらえるよう頼む。その間、装備を買いにデパートへ。入手が難しいと聞いていた竹竿が、なんとデパートに売られていた。

午後からは趙氏の友人の結婚式に参加させてもらう。我々も新郎の一族とともに、オープンカーに乗って町中をパレードした。

6/5 カシュガル→カラクリ湖

午前中は協力者へのお礼状を書いて過ごす。12:00、スバシに向け出発。14:00、ホパールで昼食をとる。2000mを越えると、白い山が姿を見せ始め、草原では遊牧民が羊、ヤク、ラクダなどを放牧している。17:30、カラクリ湖畔のロッジに着く。ムスターグ・アタが正面に大きく見える。我々のルートもよく見えるが、想像以上に長大で、まったく登攀意欲をそそられない。この日はスバシまでの予定であったが、ロッジに泊まることになる。

夜、ホールでダンス・パーティがあり、我々も参加する。客の中にタジク族の団があり、華やかな民族衣装を身につけて踊る女性の姿は、何とも美しいものであった。

6/6 カラクリ湖→スバシ→ムスターグ・アタ BC (4,100m)

高度順化のためにスバシにステイしたかったのだが、ラクダが今日しか手配できないというので、やむなくBC入りすることにする。

11:30、トラックの荷台に乗り込んで出発。12:00、スバシ着。スバシはキルギス族の小さな集落で、子供たちは愛くるしく、オヤジたちは優しい笑顔で迎えてくれた。ラクダに荷を積んで、12:50、BCに向け出発。周辺は、わずかに草がはえているが、ほとんど砂と土だけの乾燥した土地である。

吉田は一人快調に飛ばし、16時頃BC着。他の3人はゆっくり登って、17時頃にBCに到着した。吉見は頭痛に襲われ、テントを設営するとすぐ倒れ込んだ。

6/7 BC 晴れ

全員BCで休養。吉見の頭痛は、夕方にはだいぶ治まるが、吉田の腹具合がおかしい。夕方、大量にあられが降る。

6/8 BC→4520m→BC 晴れ後雪

朝っぱらから田村が、「 α 米のカートンがわからん」と騒いでいる。朝食の鮭ごはんはまずかった。体調の悪い吉見を残し、12:20荷揚げに出発。

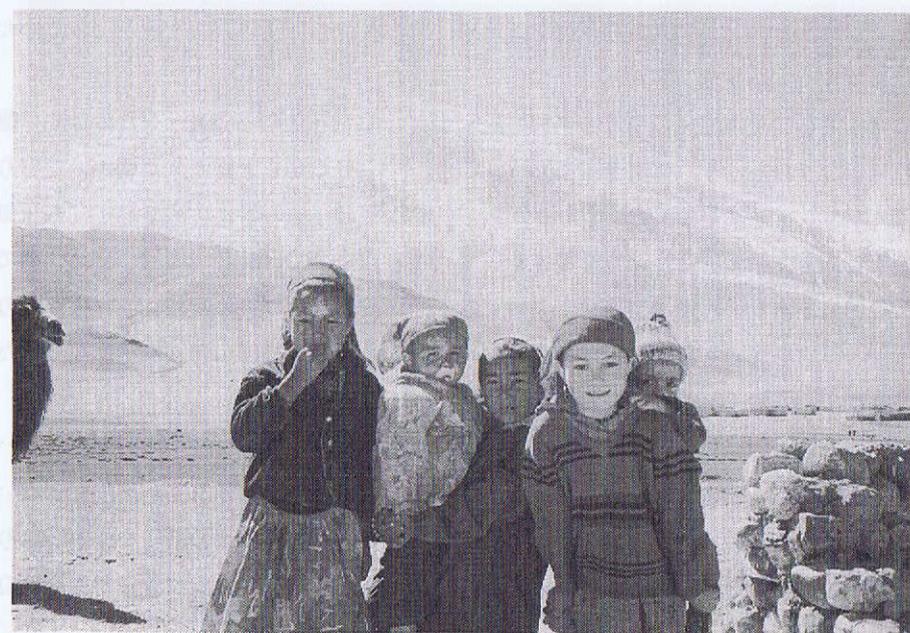
登りはじめて1時間程で黒雲が湧きでて、雷が鳴り響き雹が降ってくる。視界もきかなくなり、窪地に荷物をデポして下山する。

なお出発時に、「調子が悪いから」といってエスペースジャンボテント1つしか荷揚げしなかった田村は、雷が鳴り始めた途端、イダ天のようなスピードで吉田と中里を置き去りにし、BCへかけ下っていった。

6/9 BC 晴れ時々曇り

吉田の体調悪く、吉見の回復具合も今一つなので、好天にもかかわらず休養とする。吉田は発熱、頭痛、腹痛にくわえて肛門の周りが腫れあがり、「しばらく休養」宣言をする。

キルギスの子供たち(スバシ)



6/10 BC→C1→BC 晴れ

単調なBCでの食事に嫌気がさした田村は、吉田にフライパンと卵を買ってこさせようと、治療を理由にしきりにカシュガルへの下山を迫る。吉田は断固拒否。

田村、中里はC1を建設してステイ、復調した吉見は空身でC1往復の予定で、12:00にBCを出発する。4,900mにC1建設後、疲れから横になっていた田村と中里は頭痛に襲われ、C1泊の予定を変更してBCに下山する。休養中の吉田の体調はさらに悪化した。

6/11 BC 雪後曇り

夜半から降り続いた雪のため、BCで停滞となる。尻のできものが悪化した吉田は観念したのか、カシュガルに下る決心をした。

他の3人は、吉田の下山が決まるや否や、雪かき作業を中断して日本宛の手紙を書きはじめた。

吉田と同行した通訳の史は、吹雪のなかを何度も道に迷いながらスバシの国道にたどり着く。降雪は強まり、道路には車は1台も走っていない。2人とも凍死寸前状態で国道をカシュガル方面へ歩きだす。

しばらくして国道沿いのキルギス族の民家に行きあたり、むりやり休ませてもらう。ここにガソリタンクを積んだトラックがあったので、同乗させてもらうよう交渉する。

とりあえずカラクリ湖まで荷台に乗せてもらうが、風雪をまともに受け非常に寒い。カラクリ湖でようやく北京ジープをチャーターし、尻のできものに気を配りながらカシュガルへと下った。

カシュガルで1番大きいという病院に行き、ウイグル族らしき医者に診察してもらう。診

察室には、けがをした男が頭から血を流したまま横たわっており、およそ清潔感がない。しかも医者は、日本では既に使われていないペニシリンを打つという。丁重にお断りし、他の病院を探すことにした。

2軒めの病院では、腕利きのドクターらしい外科医が診察してくれたので、少々安堵する。結局できものの切開はせず、投薬治療をおこなうことにして、大量の抗生物質をもらう。

診察後、すぐホテルに直行し、夕食をすませたあと速攻で寝る。

6/12 BC 雪

BCでは相変わらず天気が悪く、停滞。

吉田はカシュガルで手紙を投函した後、生野菜、卵、フライパンなどを買いこみ、ジープでカラクリ湖まで戻る。カラクリ湖は相変わらず寒く、積雪量が増えている。

夕食の時、九官鳥のようにしゃべりまくるドイツ人旅行者に閉口した吉田は早々に床に付くが、通訳の史明はカラクリ湖の女性サービス員たちと明け方まで踊り狂っていたらしい。

6/13 BC→4500m→BC 曇り後雪

BCから上はガスがかかっており、しばらく様子を見るが、昼を過ぎても天気が変わらないので、13:45に田村、吉見、胡でC1へ出発。しだいに風が強まり、雪が降り始める。

14:45、4500m着。吹雪になったため、荷をデポして下る。

吉田はジープをチャーターしスバシまでいくが、ロバもラクダも手配できないので、運転手の提案によりBCまで車でのみりつけることにする。途中急な坂道で何度も立ち往生し、

ガソリンも少なくなったので、BC手前約2kmでジープを乗り捨て、荷物を抱えて歩くことになる。通訳の史明は夕べ踊りすぎたせいとか、結構つらそうだ。吉田がBCに着くと、ちょうど3人が下山してきた。

カシュガルで買ってきた野菜をふんだんに使って、夕食を作る。ビールも振舞われた。昨日から機嫌の悪い吉見は、夕食後早々にテントへ引き上げる。BCでは相変わらず、断続的に雪が降っている。

6/14 BC 曇り

上空のガスがはれず、C1方面はまったくみえない。今日も停滞とし、BCで雪崩ビーコンの使い方を練習をしたり、中里の髪を切ったりして過ごす。夜半より、大量の降雪がある。

6/15 BC→C1 晴れ時々曇り

昨夜の降雪で一面銀世界だが、久しぶりの好天だ。吉田はC1往復、他の4人（連絡官

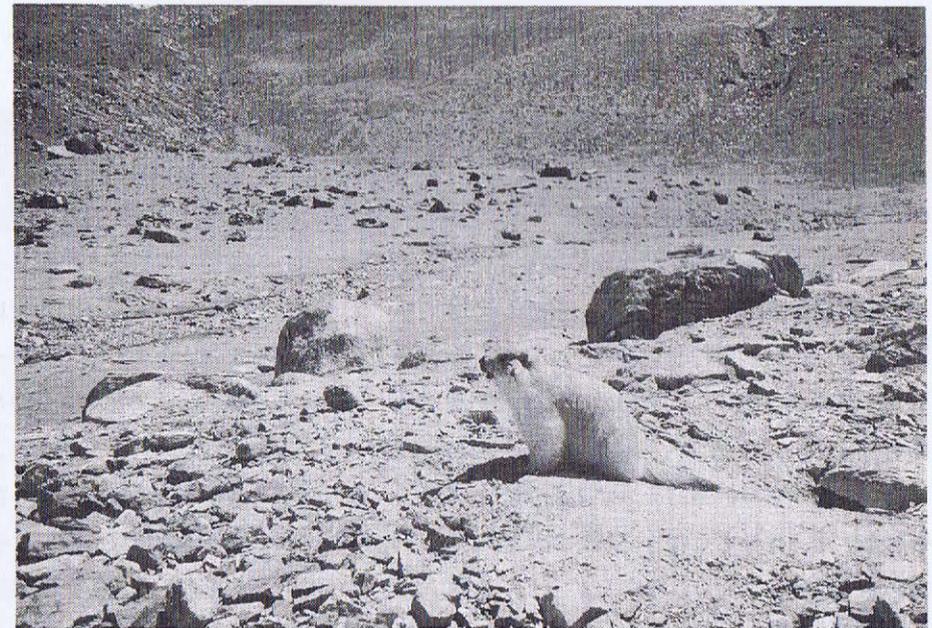
の胡含む）はそれぞれが好きな時間にC1に向かう。今日は降雪こそないものの風が強く、竹竿をかついだ田村は強風にあおられて体力を消耗した。C1は雪で埋まっており、皆で雪かきをする。

2時間ほど遅れて登ってきている中里と交信をするが、「C1感度ありますか？」という中里の問いを、「史さん感度ありますか？」と勘違いした通訳の史明が何度も交信に割り込み、中里は激怒する。C1ではそのやりとりを聞いて、皆大笑いしていた。

吉田が1人BCに下り、他はC1ステイとする。

夕食後、胡氏と筆談で身の上話を交わす。離婚歴のある胡氏が、再婚した奥さんと2人の子供（彼は少数民族のシボ族なので子供は2人まで可）をかかえ、「生活苦！」と筆談で嘆いているのをみた田村は爆笑していた。

なお、この日よりBCの隊員数が少ないときは、中国側コックの高震が食事を用意してくれることになった。



BC周辺に生息するタルバガン（マーモット）

6/16 C1→5100m→C1 晴れ後雪後晴れ

C1は吉見、中里、胡が上部のルート工作、田村はC1下のデポ品回収をおこなうこととする。BCの吉田はC1へ荷揚げ。

11:30、中里、吉見、胡でC2へのルート工作へ。所々、膝まで没する雪である。途中、中里が頭痛を訴え、一人C1へ戻る。

13:50、5100mまで行ったところで、あやしい雲におおわれ、雪が降ってきたので、荷をデポして下る。14:10にC1着。

夕方、吉田が大量の食糧を持ってC1入り。食糧の到着を待ちかねたように、早々の夕食となる。

6/17 C1→5300m→C1 晴れ

10:40、再び中里、吉見、胡でルート工作へ。昨日のトレースは埋まっている。11:45、昨日の到達点着、さらに上部へルートのをのぼす。

吉見は革製の登山靴の冷たさに耐えきれず、プラ・ブーツとの交換にBCに下る。中里と胡は5300mのセラック手前までルートのをのぼし、BCへ下山。

C1で停滞していた吉田と田村は、テントでぐーたら過ごす。まだ尻の腫れがひかない吉田は、風邪までひいたらしく辛そうだ。

6/18 C1→5200m→BC 晴れ

朝起きると、吉田の顔が土色になっていた。風邪か痔漏か原因不明であるが、発熱して行動不能となる。田村は1人でセラック下までテントを荷揚げに行く。吉田は田村のC1帰着を待って、共にBCへ下る。

BCでは、食糧計画にミスがあったことが判明し、総点検をおこなう。米や麺類等の主食が多少不足しており、この日からBC食は

現地購入の材料でまかなうことにし、中国側に少し分けてもらう。

点検作業のさなか、優雅にビールを飲んでいた吉田のもとへ、食糧係の中里が半泣きで謝りにくる。彼なりに責任を感じているらしい。吉田は日本での梱包作業をサイパン旅行ですっぽかし、購入品のチェックを怠っておきながら、「中里の涙は米粒にもならん」などとほざいている。おまけに夕食後おいちょかぶで、傷心の中里と吉見から350元巻き上げる悪徳隊長ぶりをみせた。

6/19 BC→C1 晴れ

吉田と田村はBCで休養、中里、吉見、胡の3人でC1入りとなる。胡氏はBCにたむろす犬を生け捕りにするのに夢中で、吉見らより4時間遅れて出発。結局、捕まえ損ねて「犬の肉はうまいのに・・・」と悔しがっていた。

この日はスバシから牧童が数人、放牧の牛をともなつて上がってきていたため、BCでは小川の水質汚染が心配された。

6/20 C1→5450m 晴れ

11:30、C1のメンバーはC2を建設すべく、上部へ出発。出発前に中里が雪盲の疑いありと訴えるが、たいしたことはなかったようだ。

一通りの装備、食糧、それにスキーをもつての行動となると、かなりしんどい。

デポ地をすぎるとようやくスキーが使えるようになるが、胡氏にはスキーがなく、彼一人がツボ足ではちっとも進まない。中里、吉見もスキーを脱いでラッセルするはめになる。

21:15、C2予定地には届かず、稜線に出る手前でテントを張る。夕食に新疆製のインス

タント・ラーメンを食べたが、あれは高所ではけっこうきつい。

BCでは田村が倦怠感を訴え、まだ尻の具合が万全でない吉田と一緒に停滞となる。コックの高震が、「BCにイタリア隊が入山してくる。メンバーには女性がいる」というので、我々が一部占拠していたBC小屋の荷を片付け、入山してくるであろうイタリア娘を待つ。しかしやってきたのはイタリア娘ではなく、カラクリ湖で働く男2人と、アクト県登山協会の女性スタッフであった。どうやらイタリア隊の入山は延期になったらしい。22歳だという登山協会のスタッフは、英語も話す明るい女性である。

交信時に仮C2へ、「イタリア隊のナイスなギャルがきている」と偽って伝えると、皆興奮を隠せない様子である。頃合を見計らって彼女に交信にでてもらい、英語で挨拶させる。しかし仮C2の中里は、英語が理解できないのか緊張しているのか、何を話しかけても絶句したままだ。たまりかねた彼女が「コンニチワ」と日本語で話すとようやく、「ここ、こんにちは」という中里の弱々しい返事が帰ってきた。



6/21 5450m→C2 (5600m) 晴れ

ルート工作隊は12:00に行動開始、雪が深いので空身でトレースをつけに行く。13:00、テントに引き返し、荷を背負って再び上部へ。傾斜のきつい雪壁を右上すると、稜線に出る。ただし、この稜線は広く、クレバスがあるので、アンザイレンは解けない。19:00、5600m地点にC2を設営する。3人ともに疲れがみえる。

吉田、田村の2人はC1へ荷揚げをおこなう。当初C1にあった雪はすっかり融けてしまい、ガレ場がむきだしになっている。これからC1での水の確保には苦勞しそうだ。

6/22 C2停滞 曇り

吉見と胡は頭が重く、顔にむくみがあり、天気もいまひとつなので、C2は停滞とする。

C1の吉田は昨夜飲んだ薬のせいでほとんど眠れず、眼の下にクマをつくっての荷揚げとなる。雪が風に舞う不安定な天気の中、田村と共にC2へ向かうが、セラック下のデポ地に着いた時点で疲れきってしまい、ここへ荷を投げすててC1へ下った。

2人とも高度順化が遅れており、体調も万全でないため思うように動けない状態が続いている。

6/23 C2→デポ地→C2 晴れ

吉見の調子が回復しないので、下りることになる。中里、吉見、胡でデポ地まで下り、吉見はC1へ、中里、胡はデポ品を回収して、再びC2へ。

吉田・田村のC1軍団は、気圧の影響で高度計の数値が上がるのを見て、「5000mまで高度順化ができた」、と喜んでいる。

吉田らがC1でうだうだしていると、吉見が上から降りてきたので、さっそく水汲みにいってもらおう。しかし、不調で降りてきたところに、仕事を押しつけられた彼はとても機嫌が悪く、何を話しかけてもムっとしたままだ。こんな日はお互い、「明日に備えて」という理由で早く寝るにかぎる。

6/24 C2→C3 晴れ

C2の中里、胡は、C3建設へ向け上部へ出発する。

C1の3人は、日程を7/2ギリギリまで使えるよう、BCに下って再びC1に荷上げすることにした。

BCへは主に、スキーと食糧を取りに行く。徐々にBCへ下りた吉見は、洗髪等、身の回りの用事に追われることとなる。BCでは、7/1にカラクリ湖より服務員の姉ちゃんたちが来て、7/14には日本の女子高生隊(?)が来るとの情報を得るが、その頃にはすでに下山している自分達にとっては関係のないことと思いつき、口惜しくなる。

C1への登り道はもう何回目だろうか。風

が強く、板をかつぐ身には辛い。

ルート工作の中里・胡チームは、ゆっくりしたペースだが快調に高度をあげていく。足の障害のためスキー板をはけない胡はワカン、中里はスキーという2人だけに、必然的に胡のペースで登ることになる。雪の状態は悪く、ワカンをはいても膝までもぐるラッセルだ。

ペースが遅いこともあり、C3は約6000mと予定よりもかなり低い場所に設営した。ともに90kg前後の巨漢2人にとっては、C3のゴアテックス・テントは身動きがとれなくらい狭い。激しい疲労と高度から調子の悪はずの中里だったが、BCとの交信ではつい「絶好調です」と答えてしまうのであった。

6/25 C3→6200m→C3 晴れ後雪

中里、胡は、残りの日数が少なくなってきたこともあって、好天を機にアタックをかける。ラッセルは膝下程度、スキーのない胡は遅れぎみ。C3から左に回り込むと、果てしない雪原が続いている。昼過ぎから雲が出てきて、雪が降り始め、やむ様子もないので、6200m地点より下る。ちなみに中里は、BCとの交信で「頂上まであと2時間の地点で撤退」と報告していたが、どういう根拠で「2時間」としているのかは全く謎である。

C1の吉田、田村、吉見は11:25にC2へ出発する。しかし、田村がテントをでて荷をかついだとたん、ザックの肩ひもがちぎれた。結局修理のため、1人BCへ下るはめとなる。

一方、C2へのルートを快調にとぼす吉見に対し、スキー板を背負った吉田はあえぎながらの登高が続く。ようやくたどり着いたC2は、テントの中央が陥没して悲惨な状況であったが、面倒くさいのでそのまま寝る。外

は吹雪で非常に寒い。

6/26 C3、C2 曇り時々雪

前日に田村が予想したとおり、今朝は悪天となった。風も強く、C3、C2ともに停滞とする。初のC2泊りとなった吉田は少し調子を崩していたが、バクチで吉見から90元を巻き上げたとたんに元気になった。

ヘビースモーカーであるC3の中里と胡は、とうとうタバコを切らしてしまい、苦肉の作として紅茶の葉を新聞紙に巻いて自家製タバコを作成する。しかしあまりのまずさに、狭いテントのなかでむせ返る2人であった。

なお、最終キャンプの高度が6000mでは低すぎると判断した田村は、夕方の交信でC3の位置を上げるよう要請した。しかし、C2の吉田は、「C3の2人に任せよう。なぜなら彼らは絶好調だからだ」と、まるで他人ごとのように聞き流していた。

6/27 C2→C3→C2 晴れ

吉田、吉見は空身でいけるところまで往復するつもりで、8:45に出発。11:15にC3に着くと、登頂をいったん諦めた中里、胡が下る準備をしていた。しかし、吉田の体調が今一つのため、吉田と胡がC1に下り、中里、吉見がC3上部を往復した後、C2ステイという行動に変更する。

中里、吉見は12:20にC3発をするが、200mほど登ったところで雪が降り始めたため、C2へ下る。15:20にC2着。

C1へ下る途中の吉田は、胡のアンザイレン拒否に会い、ノーザイルの状態で腰までヒドンに落ちるなど、散々恐ろしい思いをした。一方の胡はクレバス帯をもとせせず、尻セードーで豪快に下っていった。

C1で胡より、中里の最近の体調が「絶好調」とはほど遠かったことを聞かされた吉田は徐々に激怒する。

吉田は17:00の交信で中里を怒鳴り散らし、怒り狂いながらBCへ下った。



緩斜面でレストをとる中里(左)と胡

6/28 C2→C1 晴れ

中里が肺水腫のような症状を訴えたため、吉田はC2の2人に「BCへ下山しろ」と指示を送る。しかし、このところ調子を上げてきた吉見はBCへの下山を拒否。とりあえずアンザイレンの必要なC1まで中里に同行し、C1ステイとした。

中里はふらふらしながらもなんとかBCへ下った。最悪の場合、カシュガルまで下ろすことも考えたが、BCでの休養でなんとか回復しそうでである。しかし日期的にムスターグ・アタの登頂は、断念せざるを得ないだろう。

BCの田村と昨日下山したばかりの胡は、荷揚げのためC1へ上がり吉見と合流する。医療担当の吉田はBCに残り、中里の様子をみることになった。

6/29 C1→C2 晴れ

11:05 に田村、吉見、胡はC2へ出発。初めてC2へ上がる田村は、「だるい」を連発しながらなんとか吉見についてゆく。20:10 にC2へ到着。



ムスターグ・アタ山頂に立つ吉見

BCの中里は調子が悪く、午前中の咳込みがひどい。

6/30 C2→C3 晴れ

昨日のC2到着時から尿がでず、夜もほとんど眠れない状態だった田村をC2に残し、12:35 に吉見と胡はC3へ出発。2人とも調子がよく、17:00 にはC3へ着いた。

到着後、吉見は明日のアタックのために上部ヘトレースを着けにゆく。

BCの吉田は晴れ間を利用して、洗濯、日光浴に余念がない。しかし、いくら山のなかとはいえ、全裸になって岩の上で身体を焼く吉田に周囲は閉口する。

このところの高温のせい、上部の氷雪が解けBCは池のような状態となった。中里の具合は大分回復している。

7/1 C3→山頂→C3 晴れ

C3の吉見、胡は8:25、頂上アタックへ。20:15、吉見登頂。胡氏は頂上に届かず、6600mにてビバーク。24:30、吉見C3帰着。

ムスターグ・アタ登頂記

吉見 敦司

興奮からか、目がさえてほとんど眠れず、起床予定の6時が待ちきれず起きて外を見ると、満天の星空！胡さんも起きていたようで、「天気好好!!」と喜び合いながら出発の準備をする。8:25、ビバーク用具一式を持って出発。かなり気温が低く、風も強いので非常に寒い。雪面も固くてスキーが使えず、ツボ足で進む。9:30頃、陽が当たるようになってもお寒い。-20℃を下回っているだろう。C2で、「オーバースボンなんかいらねえべ」なんてあなどって、カップにしたのが間違いだった。下半身が寒くてしょうがない。自分のアバウトさを呪わずにはいられない。

11:30、6300m着。ようやくスキーが使えるようになる。この頃から胡さんが遅れ始め、その差は開く一方で、6400mで一時間以上待つ。6550mで再び待つが、いっこうに姿が見えないので、先に行かせてもらう。目の前にはドーム状のピークが見えるが、残りの高差からして頂上とは考えられない。しかし、高度計が壊れたのかもしれない、あれが頂上に違いない、などと考える。そうでもしないとだるくてやってられないほど、単調な斜面が続く。17:30、そのピークの上に立つと、上部にははるかに雪原が続いていた。

18:00、6700m着。ここから、ふたつの尾根が合流する地点にピークが見えた。もしそれが頂上でなくても、そう遠くないだろう、空身なら1時間半～2時間で到達できそうだと考え、天候悪化の兆しも見えないので、トランシーバーとカメラだけ持ってアタックを続行する。目指すピーク下には18:50に着いたが、さらにその奥になだらかなピークが見え、今度こそは頂上であろうピークをひたすらめざす。19:30、まだ着かない。20:00まだ着かない。20:00を過ぎたら引き返そうと思っていたが、あと20分もあれば着きそうなのでそのまま歩き続ける。頂上直下はクラストしており滑らないように下ばかり見て歩いていたのだが、ふと我にかえって上を向くと、そこはすでに頂上だった。20:15、高度計 7050m。頂上は、広い台

地で、鋭い岩峰が最高地点のようだったが、そこまで行く時間がなく、写真をとって、すぐに下山にかかる。帰りはスキーで快適に滑る予定だったが、スキー技術の未熟な私は（ゲレンデ経験は2回のみ）数百回はこけることが予想され、結局ツボ足で下る。

21:30、6600mで、先に下ったと思っていた胡さんが私を待っていた。一緒に下るために待っていたのかとおもいきや、「ここでビバークしよう」と言う。いくら物好きの私でも、こんな寒いところで寝る気にはなれない。「オレは下半身カッパなんだぞ、一緒に下りよう」と説得するが、胡さんはどうしてもここで泊まって、明日頂上を狙うと言い、その気迫には並々ならぬものがあったので、私はC3に戻ると言って、ツェルト、コンロなどのビバーク用具を渡して、22:00、一人C3へ下山を急ぐ。

はじめは缶メタを渡したのだが、「不明白、ガス！ガス！！」と言うので、ビバークを優先し、EPIを渡す。しかし、これでC3にはコンロがなくなった。帰ってもメシが食えない。ああ！

下りとはいえ、疲れた体にツボ足のラッセルはきつい。陽が沈むまでには帰れるだろうと思っていたが、表面だけ固い最悪のラッセルではかどらず、ヘッテンで足元を照らしながら、24:30、ようやくC3着。しかし、C3にはコンロは没有、缶メタでカップ一杯の水を30分かけてお茶にし、それを飲んでシュラフに入ったのは、1:30だった。

7/2 ビバーク→頂上→C3 曇り後雪

胡は6600mのビバーク地から6時間かかって、14:30に登頂。厳寒のなかのビバークはよほどつらかったようで、フラフラになってC3に着いたのは23:00近くであった。

無線を持たない胡が単独で行動しているため、C3の吉見、C2の田村はともに停滞を強いられた。しかも吉見には火器がなく、1日水も飲めない状態であった。

各キャンプでは胡が遭難した場合を想定し、捜索活動も考えていたが、C3への帰着を聞き、皆ホッとす。

7/3 C3→BC 曇り時々雪

吉見と胡は、13:35にC3を撤収して下山にかかる。胡氏はアンザイレンしようというのも聞かずに尻セードーでとばす。15:20にC2に着いて、田村と強風のなかテント等を撤

収しBCへ向かう。

吉見と田村は30kgをゆうに越える荷の重さにあえぐが、個人装備しか持たない胡は快調におりていく。途中田村は、C2下のクレバスを踏み抜き足を痛めた。

あまりの重荷をみかねて、BCから吉田が荷下げを手伝いにくることになった。C1上部のルンゼは、高温で融けて度々雪崩しており、そこを下ろうとした吉見と田村に、ちょうど下から上がってきた吉田が大声で注意する。2人はルンゼをトラバースして尾根ぞいに下る。吉田が合流して荷分けをするが、吉見は軽い肺水腫なのか、妙に息が荒い。

21:00にBC着。BCでは今日中にカシュガルに下るべく、撤収、梱包作業が進んでいた。しかし約束通りにラクダが来なかったため、吉田が通訳に当たり散らす。22:30ごろ、馬方がラクダ5頭を連れてくるが、もうほとんど陽が沈んでおり、この日はBCで泊まることにし、小屋で寝る。

なお、吉田に怒鳴られた通訳の史明は、ラクダを呼びにスバシへ下ったらしく、その夜は行方しれずとなった。

7/4 BC→スバシ→カシュガル 晴れ

ラクダに荷を積んで、ゆっくりスバシへ下る。BCより下は花が咲き乱れている。登頂を逃した中里は下山途中、何度も悔しそうにムスターグ・アタを振り返っている。トムールのための高所訓練と割り切って、さばさばしている吉田、田村とは対照的な姿である。

スバシの草原も、絨毯を敷いたように花で一杯だ。スバシには日本人の登山隊らしき一行がテントをはっていた。噂の女子高生隊かと思ったが、周りをゴリラのような大男がう

ろついている。田村は、「引率の先生でしょう」と意に介さず近づいていく。すると、こちらに気がついて、握手を求め歩み寄ってくる小柄な女性が2名・・・。

残念ながら、目の前に現れたのは40年程前の女子高生であった。

一行はベテラン女性登山家の遠藤京子氏率いる、京都山岳会のムスターグ・アタ登山隊だという。我々は先ほどの落胆もどこへやら、ちゃっかりお茶とハミウリをご馳走になる。

なお、我らが通訳の史明は昨夜道に迷いながら下山し、草原でビバークしたらしい。

カラクリ湖まで下り、昼食をとる。そこで、チャーハンを食べていた日本人らしき若い女性2人と会う。2人は、北京の大学で中国語を学ぶ日本人留学生で、京都隊に同行してここまで来たという。

帰路は我々の車に同乗してカシュガルまで戻るといので、予期せぬ出来事に一同は俄然色めきたつ。まさに、「捨てる神あれば、拾う神あり」といったところであろうか。

カシュガルまでの道路は、土石流で崩壊している箇所が所々あり、横転したトラックに道をふさがれるなど、思いのほか時間を食う。

7/5 カシュガル

今日はカシュガルで休養である。午前中、吉田と田村はホテルの散髪屋で髪の毛を切る。5元（約60円）の散髪代にしては、2人ともこざっぱりとした髪型になった。

午後はバザールに土産を買いにいたり、登山協会との清算を済ませたりと、それなりに忙しい。吉見と中里はウイグル族の民族楽器を購入した。

同じホテルにいた京都山岳会隊の隊長さん

はウルムチの街中を歩いている際、誤って側溝に落ち、頭をけがして休養中とのことであった。中国では道端に唐突に穴が開いているところが多く、夜は街灯も暗いのでこの手の事故はかなりあるそうだ。お気の毒である。

夜は昨日カラクリ湖から同行した日本人女子留学生（大海、有馬両嬢）と、楽しくおしゃべり。北京の大学に留学中という彼女たちの数々の武勇伝と、鋭い観察眼に基づいた京都山岳会隊諸氏のモノマネ（特に遠藤京子氏）は、なかなか聞きごたえがあった。

2. トムール峰への挑戦

7/6 カシュガル→アクス

車3台に分乗し、カシュガルからアクスへむかう。これからクチャへゆくという大海、有馬両嬢もアクスまで同乗する。アクス～カシュガル間は砂漠のなかをひた走る。あまりの暑さに皆グロッキー気味だ。

アクス到着後はアクス賓館の新館にチェックインした。夕食後、通訳史明の強い希望に



おかま男とダンスに興じる中里

より、町のカラオケ屋にくりだす。そこはカラオケ屋というよりも生バンド付きのダンスホールのようなところで、人民たちは『北国の春』の北京語バージョンにあわせてダンスに興じているという異様な空間であった。

そんななか、大海、有馬両嬢は北京語のデュエット曲を披露し、やんやの喝采を浴びていた。一方、我等が中里はヒゲ面のおかま男に誘われるまま、なにかにとり憑かれたかのように踊り狂っていた。

深夜、ほろ酔い気分でホテルに戻った田村は、同室の吉田が中里を呼びつけ、「腹がへった。バザールへ行ってシシカバブー買ってこい！」と命令をしているのを薄れゆく意識のなかで聞きながら、深い眠りにおちた。

7/7 アクス

朝起きた田村は、部屋の片隅に冷えきったシシカバブーが放置してあるのを見つけた。隊長の命を受けた中里が、昨夜遅くバザールを駆けまわって、やっとの思いでシシカバブーを買って戻ってきたときには、既に吉田は

熟睡していたという。おまけに、「なんでこんなもんが部屋にあるんじゃ？」などとのたまっている。可哀想な中里。これから吉田のことを「理不尽隊長」と呼ぶことにしよう。

クチャに旅立った留学生の2人を見送ったあと、トムール用の食糧を買い出しにいったり、留守本部等へ手紙を書いたりして過ごす。

7/8 アクス→タカラク牧場

朝食後、吉見と中里は野菜の買い出し、吉田・田村は登山協会でトラックに荷を積み込む。作業終了後、1990年の遠征時の連絡官だった高敏氏からビールをごちそうになる。

13:50、ジープ2台、トラック1台に分乗して出発する。登山協会主任のアクス張さんの娘（16歳、しかも巨乳）もなぜか同行する。

17:00、馬方ケンジの住む集落へ着いたとたん、激しい雷雨に見舞われる。18:00、タカラク牧場（ピンタイズ）到着すると、小ぎれいな客を乗せたバスが草原を走っている。どうやらここは、アクスなど都市生活者の観光地と化しているらしい。しかし、ジープでたどり着くのもきびしい悪路を、よくもまあ、こんなボロいバスで通ってきたものだ。

晩飯前にタカラクの村長らしき人から、今回の遠征に参加してくれる馬方を紹介される。ケンジ以外にも何人か見覚えのある顔がいる。そのさい、パンをほうばりながら村長らのあいさつを通訳していた史明に対して、吉田と連絡官の胡が怒りをあらわにする。

7/9 タカラク牧場→2400m 晴れ

例によって馬方の荷積み作業に時間がかかり、出発までの時間をもてあましてると高敏につかまった。朝っぱらから無理矢理白酒

を飲まされ、閉口する。

ちっとも働かない史明に頭を痛める吉田は、アクス張さんの娘（父親の仕事にかこつけてタカラクに遊びにきていたらしい）がカタコトの英語をしゃべることに目をつけ、「通訳としてBCまで同行してくれ」などと、16歳の女子高校生に無理難題をふっかけている。さすがは巨乳好きの理不尽隊長。

結局、「体調不良」を理由に史明通訳はウルムチに返すことにし、通訳なしでトムールへむかうことになった。

13:20、ようやくキャラバン開始。田村は歩きはじめて間もなく、ムスターグ・アタで痛めた左膝を悪化させ、杖に頼りながらの歩行となる。

今日は2600m地点までいくつもりだったが、2400mの草原手前の沢が増水していたため、仕方なく草原手前の草地にテントを張る（18:30）。夕食前、吉見と中里はケンジとともに、食用の山羊を買いに行く。子山羊70元、大山羊150元であった。

7/10 2400m 曇り時々雨

偵察の結果、沢の水量が多く馬での徒渉も難しいため、明日対岸に橋を渡してからキャラバンを再開することにする。

小雨のなか、今日は1日橋づくりをおこなう。特にケンジは、対岸にわたって土台の石をつんだり、川底を浚渫して水の流れをかえたりと奮闘する。しかし他の馬方の働きが芳しくなく、今日の作業は人が辛うじて渡れる程度の橋を造るにとどまった。

夕食には、昨日買ってきた山羊肉のスープがふるまわれた。2匹の山羊のうち、大きいほうは馬方の手によって素早く解体されてい

たのだ。

7/11 2400m→2400m 雨後曇り

昨夜はかなり激しい雨が降った。馬方たちは朝から焚き火をおこしている。ケンジは昨日解体した山羊の頭を焼いて、脳味噌をほじってうまそうに食べていた。

小雨のなか、流木を使って橋の補強作業をおこなう。11時頃、ようやく馬がわたれるくらいの橋が完成する。しかし、荷を背負わせたままでは危険なので、人が荷物を対岸に運び、馬は空身で橋を渡すことにする。この作業に思いのほか時間がかかり、結局キャラバンは進められず、対岸の草原で一泊するはめになった。

作業中、上流からヤクの群れが怒涛のように走ってきて、集団で濁流を渡りはじめた。あまりの迫力に見入っていると、生後間もないであろう子ヤクが急流にのまれ、あれよあれよという間に下流へと流されていく。なんとか中州に流れついたときには、既に群れは対岸へ渡り終わったあとだった。とり残された子ヤクはブルブルと震えて立ち尽くしている。ここで田村と中里の救助隊が出動。大捕

り物の末、イヤがる子ヤクを捕獲し群れに戻してやった。

7/12 2400m停滞 大雨後曇り

昨夜遅くから降りはじめた大雨は一向にやむ気配はなく、小便をしにテントからでるのも決死の覚悟である。早々に停滞を決め、1日うだうだと過ごす。

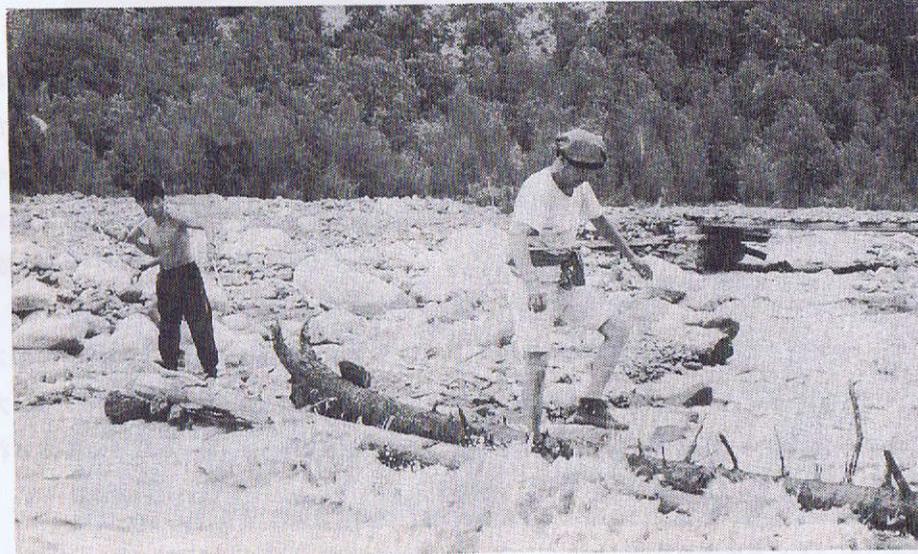
午後からは少し晴れ間もみえるが、まったくもってはっきりしない天気である。この様子では、高度順化の効力もいづれなくなってしまうのではないかと不安になる。

7/13 2400m→3100m 曇り

ようやく晴れ間がみえるが、雲量が多く上部の天気は相変わらず悪いようだ。昨日の大雨で沢はさらに増水し、せっかく造った橋も壊れかかっている。

12:00、3100m（クンバイリ）へむけ出発。2400mで買った子山羊は吉見が引っ張って連れていく。子山羊は歩きながら悲痛な鳴き声を連発するため、まるで吉見は動物を虐待する悪人のようにみえる。

増水した川に橋を架ける



16:00、クンバイリ到着。吉田はケンジらとモレーン地帯の偵察に、馬方2名は遊牧民から山羊を買いつけに行く。モレーンの踏み跡はズタズタに寸断されており、1日で通過するのは困難とのこと。また山羊を2匹購入し、さっそく夕食用に1匹を解体する。彼らのムスリム流の解体法は、最初にのどを掻き切って血を流ぬいた後、後ろ足の関節部分を切ってそこから空気を吹き込む。すると山羊の身体は風船のようにふくらみ、馬方はその張り具合を利用して皮をきれいにはいでいく。お腹にナイフを入れた後は、骨格に沿って肉を切り分け、臓物をとりだすという手順である。

臓物のなかでも、腸は串焼きにして食すが、胃袋は保存食の袋として利用するという。

7/14 3100m 雨

夜中の3時頃から強い雨が降り出し、朝になってもやまずに停滞となる。キャラバン中、隊長と同じテントの田村は、吉田のあまりの口うるささに閉口する。

7/15 3100m 晴れ

天気は良いものの、吉見と中里が腹痛を訴え、隊員のBC入りは取りやめ、両胡氏とカートンだけBCへ行くことにする。

暇な吉田と田村は、この辺りに生息するウスバシロ蝶が日本で一匹5千円で売れると聞き、蝶アミを手に血走った目で飛び回っている。

7/16 3100m 晴れ

馬方たちがBCから戻るのを待たなければならぬため、本日も3100mにステイ。

7/17 3100m→BC 曇り時々晴れ

10:00に出発の予定だったが、例によって馬方の準備が遅く、11:40になる。モレーンは一度馬が往復してるだけあって歩きやすく、速いペースで進む。ルートは、起伏の少ないモレーンの右岸（氷河上部からみて）沿いにとる。17:00、カシカール氷河の出合付近を通過。一昨年の遠征で、馬方のストライキのため、ここでビバークしたのを思い出す。



馬方に解体される哀れなヤギ

左膝痛のため馬に乗っていた田村は、急傾斜のモレーンで鞍ごと落馬したため、以後足を引きずりながら歩く。主を失った馬に中里が乗ろうとしたが、巨体を嫌がったらしい馬に蹴りを数発入れられ、半泣きになっていた。

18:50 にBC着。胡氏がお茶と揚げパンで出迎えてくれる。BCの周辺は色あざやかな花が真っ盛りで、疲れを忘れさせてくれる。

90年の遠征で遭難した3人のレリーフに手を合わせ夕食。BC建設を祝う。

7/18 BC→4300m→BC 曇り後雨

朝食後カートン整理をして、13:00 に上部偵察に出発。氷河上には一昨年作ったケルンは残っておらず、ルートを作りながら進む。

BCを出たときから降っていた雨は、あられに変わり、雷が鳴り出したため、4300m地点に荷をデポして下る。

7/19 BC→4550m→BC 晴れ

中里が膝の痛みを訴えたため、吉田、吉見で11:40 にアイス・フォールのルート工作へ出発する。13:40、昨日のデポ地着。そこからのセラック帯は、ルートが複雑で歩きにくい。

15:30、アイス・フォールに取り付く。中央の流水溝沿いに、ほとんど問題なく雪原に出る。一昨年苦労したのが嘘のようだ。だが雪原上はこれまでにないほど程クレバスの開きが大きく、安全なルートを求めて右往左往する。

17:00、大きなクレバスがなくなったところで行動を打ち切り下山する。

7/20 BC→C1 (4600m) 晴れ

吉田と吉見が12:40、C1建設に発つが、セ

ラック帯のルートがなかなか把握できず時間を食う。アイス・フォールを抜け、雪原に出ると、風が冷たく寒い。19:40 に雪原の奥の4600mにC1を設営しステイする。

田村は膝の様子をみるために荷揚げを試みたものの、痛みがひどくなりデポ地手前で引き返す。どうやら靭帯が伸びているらしく、膝の皿がぐらぐらし、水もたまっている。

なお、田村のパートナーとして荷揚げについてきたヤギは空腹のあまり、デポ品のトイレットペーパーや吉見のフィールドノートをパクパクと食べるのであった。

夕方の交信の際、アタックを吉田と吉見の2人で行うという吉田と、中里にもチャンスを与えるべきだという田村との間で意見が分かれる。

吉田は中里の話をハナから信用しておらず、ケガを口実に荷揚げをサボっていると判断したらしい。一方田村は、性急な吉田の判断に危惧を感じるとともに、「これでトムールの登頂チャンスもなくなるのか・・・」といじける中里の言葉を信じ、その弁護をかってでたのであった。

7/21 C1→デポ地→C1 晴れ後曇り

吉田の体調がすぐれずBCに下ることになり、11:30 にC1を出発する。

13:40、膝の痛みが和らいだという中里と合流した吉見は、デポ品を持って再びC1へ。中里はびびりながらクレバス帯を通過する。

辺りはしだいに黒い雲に覆われ、雨が降り始める。17:40、C1に着いた頃には雪に変わった。

夕食後、BCの吉田と田村は胡に白酒を勧められる。最初は嫌がっていた田村だったが、

興がのると一気にひと瓶を飲み干した。泥酔した田村は、胡に「ヤギを殺さないでくれ、ヤギは俺の友達だ」と筆談で(しかも吉田のフィールドノートに)何度もくだを巻いた。

閉口した胡から、「お前の気持ちはわかった。山羊は殺さないようにしよう」と確約を得ると、田村は「吉田さん、俺はうれしい。今夜はヤギと一緒に寝ますよ」と言い残し、ヤギを伴い吉見のテントで就寝した。

7/22 C1→BC 晴れ

田村は明け方4時頃、気持ちが悪くなって目覚めた。吐く息が異様に白酒臭い。ふとみると、テントの片隅にヤギがうずくまっている。ヤギはおもむろに起きあがると、シュラフの上に糞をした。我に帰った田村は、ヤギをテントからたたき出すと、糞を片づけ自分のテントに戻った。

一方C1では、昨日の行動中に中里のプラブーツにひびが入ったらしく、交換のためBCへ下る(12:50発)。

中里は下りで、再び膝の痛みを訴える。BCでプラブーツを点検したところ、爪先の部分がパッキリと縦に割れていた。よほど強い力がかかったのだろう。

夕方、吉見のテントから悲鳴が聞こえる。愛用のブリーフとシャツのえりに、ヤギのうんこが付着していたらしい。

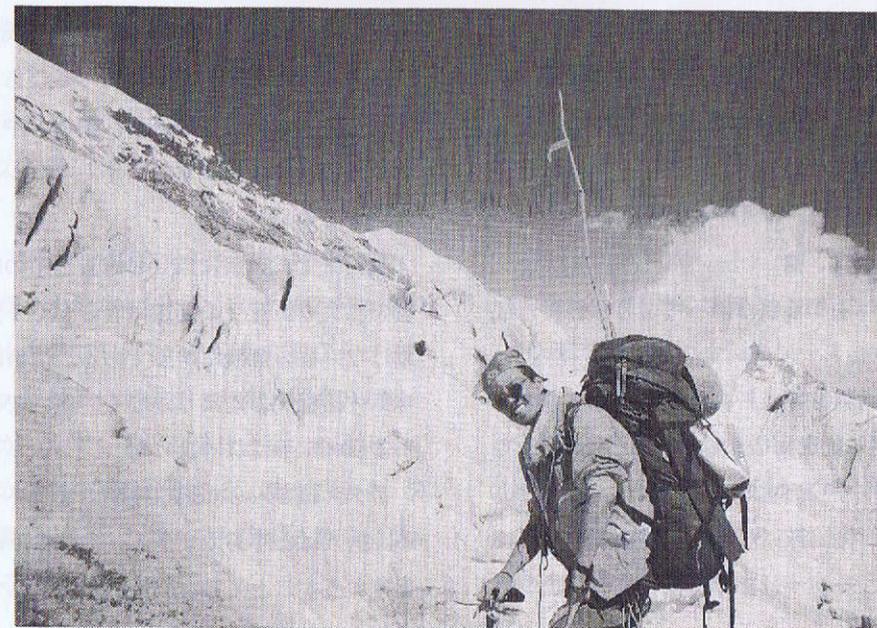
7/23 BC 雨後曇り

昨晚から雨が降り、停滞となる。暇にまかせて、夕食にロール・キャベツなどを作ってみる。

7/24 BC→C1 曇り後雪

中里の膝が回復せず、12:05 に吉田と吉見はC1へに出発。中里は一度C1に上がってからは、けがのせいもあるのか、まるでやる気がみられなくなった。

吉田隊は16:30 にC1着。C1周辺は、時折クレバスの動く音がするので、たまらずテントを移動する。



C1目指して登高する吉見

7/25 C1→4850m→C1 晴れ

C1の吉田、吉見はABCへ荷上げ。C1から斜面を登りきった台地は、大小たくさんクレバスが口をあけており、通過に苦勞する。4850m付近に荷をデポして下る。

17:15、C1に到着。テントの真下で氷の割れる音が連続して起こり、再びテントを移動する。

7/26 C1→ABC(4950m) 晴れ後雪

ABCを建設すべく、11:30にC1を撤収して出発。13:35、昨日のデポ地着。空身で上部へ雪壁の偵察に行く。田部井隊C2(1986年の日本女子登山隊のC2)まではクレバスの開きが非常に大きく、その度に端から端まで移動しなければならない。

15:35に5100mの田部井隊C2着。雪壁の状態は一昨年とはだいぶ異なる。ポイントは、中間部のクレバスを伴ったギャップと、上部の稜線に抜ける手前のギャップだが、どちらもなんとかなりそうだという判断をして下る。

一昨年雪崩にあった田部井C2を避け、ABCを4950m地点に作ることにして、アタック用の大量の荷を二回に分けて運び上げる。

18:00、C1を撤収しABCを設営。このころから雪が降り始める。

7/27 ABC 雪

ABCは朝から雪が降っており、停滞となる。

BCでは無線で、モレーンを日本の労山カシカール(約6300mの未踏峰)登山隊が登ってくるのをキャッチする。

出発前、労山隊に現地の情報提供を頼まれた田村は、モレーンまで出張し彼らがBC予

定地としているカシカール氷河まで誘導する。

7/28 ABC 曇り時々雪

雪壁にだけ濃厚なガスがかかっており、降雪中と思われ様子をみるが、10:00ごろからABCにも雪が降り始め、停滞を決める。

BCには、カシカール隊の通訳ヌル氏とアクス登山協会主任の張氏が来ており、交信で激励を受ける。田村が白酒をしこたま飲んで酔っぱらっており、ろれつの回らない舌で「日数はあるから無理するな！食糧がなくなればいつでも荷上げする！」と繰り返し叫んでいた。

7/29 ABC 曇り後雪

相変わらず雪壁はガスで覆われており、出発を見合わせる。夕方から雪が降り始める。

7/30 ABC 晴れ後雪

せっかく晴れてくれたが、昨夜の雪のため停滞せざるをえない。いいかげん停滞生活も飽きてくる。

昼頃、BCにカシカール隊のヌル氏から、「病人がでたので、酸素を持ってこちらに来て欲しい」との要請がある。田村と中里は、非常用の携帯酸素3本をつかんでカシカール氷河まで急ぐ。

氷河上で、担架に乗せられ搬出中の病人一行と出会う。重度の高度障害らしく1人では動けない程の危険な状態である。携帯酸素では気休め程度の効果しかなく、急いで下におろす以外に手はないようだ。

アクス張さんらが馬を呼びにモレーンを下る。病人はとりあえずトムールBC下の草原までおろすことにし、交代でおんぶして運ぶ。

カシカール隊は、酸素のせい少し状態が良くなったので、馬がくるまで草原にテントを張り待つことにするという。我々はジャンボ TENT、コンロ、シュラフ、ダイアモックス等を提供し、BCに戻る。

病人の搬出作業に大活躍した中里は、他の隊員の一見薄情に見える対応に憤慨している。

7/31 ABC 雪後晴れ

昨夜から断続的に降雪があり、ABCは停滞。午前中に雪は上がり、快晴となる。

BCの田村と中里は、昨日に引き続きカシカール隊の病人の救出に関わるはめとなる。

病人はほとんど意識がない様子で、肝機能障害なのか顔には黄疸がでている。病状は極めて深刻であり、馬もなかなか到着しないので、人間が交代で担ぎ下ろすことになった。

比較的年輩の隊員が多いカシカール隊の中に入ると、我が中里のパワーは圧倒的である。彼はカシカール本隊が登攀を中止して搬出作業に合流するまで、救出活動の中心的役割を担っていた。

結局、田村と中里は本隊に救出活動をバトンタッチし、暗くなる前にBCに戻った。

この日カシカール隊一行は、モレーンの途中で力つきてビバークしたらしい。

8/1 ABC→5000m→BC 晴れ時々雪

早朝、小雪がちらついていたが、5:30頃にはやんだので準備し、7:55、雪壁アタックへ出発。雲は多いが青空も見え、雪壁のガスも取れかかっている。40分ほど登ったところで、吉田が体調の不良を訴える。胸が苦しく、気分が悪いというので、ひとまずABCに引き返すことにする。

ABCで落ちついても回復せず、BCに下ることにして、13:30、出発。この頃から雪が降り始める。1週間前のトレースは消えており、クレバスの処理に神経を使う。

19:10、BC着。

なお、カシカール隊一行は、モレーンの下部でタカラクから上がってきたケンジー一行と合流し、なんとか病人を下山させることに成功したという。

8/2 BC 晴れ

吉田の回復を待って休養。洗濯などをして暇をつぶす。

8/3 BC 曇り

吉田の調子が戻らず、ひき続き停滞。そろそろ食生活もマンネリ化してきたので、吉見は、カシカール隊のBCを訪れ、お茶、ソース、マヨネーズなどの食糧を恵んでもらう約束を取り付ける。

8/4 BC 曇り時々雪

吉田が復調せず、もう一日様子を見る。BCは時折青空も見えたりするが、この日も雪壁周辺からは終始雲が取れない。

8/5 BC→4300m→BC 晴れ後曇り後雨

晴れてはいるが、トムール方面は雲がかかっている。出発の準備をしていると、カシカール隊の協力員が念願のソースとマヨネーズを持ってきてくれた。11:45、吉田、吉見はABCへ発つ。モレーンの途中で、吉田が不調を訴える。風邪と肺水腫を併発させているようだ。吉田はBCに戻り、吉見はデポ地まで荷を上げてからBCへ。

吉田の早期回復は見込めず、今後のことが話し合われる。田村はムスターグ・アタで痛めた膝がまったく治らないため、同じく膝を痛めているというが、比較的コンディションの良さそうな中里がアタックに向かうことになる。

8/6 BC 雪

昨夜から雨が降り、今朝は雪のため停滞。昼前にいったんやむが、その後も降ったりやんだりの天気であった。

8/7 BC→ABC 雨後晴れ後雪

昨夜は星空だったにもかかわらず、今朝はどんより曇っており、9:00頃から雨が降り出したが、吉見、中里はABCに向かう準備をする。10:30頃には雨もやみ、11:05、出発。しだいに雲が取れて快晴となる。雪原に出た頃から再び雲が出始め、雪が降り出す。クレバスはほとんど雪に埋まっており、通過に苦労する。18:45、ABC着。ABCのテントは雪に押しつぶされ、中は水浸しであった。



悪天のため4950mのABCで停滞

8/8 ABC 雪後曇り

4:30に起きると、相変わらず風雪強く、予定していた雪壁の試登は中止。断続的に降っていた雪も、17:00頃にはやんだ。

8/9 ABC→5250m→ABC 曇り時々晴れ

5:20、起床。明るくなるのを待って雪壁の様子を見に行くことにする。8:25、発。

積雪は意外に少なく、5cmほどで、その下の雪は硬く締まっている。9:10、田部井隊C2着。2週間前にはなかったブロックが散在している。上部ギャップの形状が変化しており、おそらくそこから落ちたのだろう。

雪壁に取り付いても積雪の状況は変わらない。しだいにガスが出てきて上部が見えなくなり、5250mまで登って引き返す。12:05、ABC着。明日天気がよければアタックの予定。

8/10 ABC 晴れ後雪

4:00、起床。雲一つない快晴となったが、中里が頭痛と吐き気を訴え、アタックは中止。夕方にはだいぶ復調するが、天気が崩れ始め、20:00頃から強い雪が降り始めた。

8/11 ABC 雪後晴れ

4:00に起きると、雪は降り続いており、積雪は40cm以上に達している。この積雪量では動くことはできず、停滞。

9:00頃には雪はやんで快晴となり、この好天は1日続いた。

8/12 ABC→5300m→ABC 晴れ

雪壁の雪の状態を見に、7:00、出発。気温が低いせいか、雪面はクラストしている。

7:45、田部井隊C2着。5300mまで登って、弱層テストを行なう。最上部には5cmほどの固い雪の層があり、その下は40cmの柔らかい雪の層となっていて、軽い力で簡単にはがれてしまった。がっくりうなだれていると、すぐ右のルンゼで三回ほど立て続けに表層雪崩が起こり、逃げるようにして田部井隊C2までかけ下る。

10:00、ABC着。明日は、雪壁アタックのタイム・リミットである。

8/13 ABC 晴れ

4:00、起床。昨夜、少し降雪があった。今日は、昨日よりもだいぶ気温が高い。頂上アタックに必要なものすべてを持って、6:00、出発。6:40、田部井隊C2着。まだ薄暗く、雪壁の様子はわからない。

7:35、昨日の到達点に着いて、弱層テストを行なう。雪の状態は昨日と変わらず、それに加えて、昨日降雪があったこと、気温が高いこと、中里が頭痛を訴えたことなどから、これ以上の登高は断念し、ABCを撤収してBCに下ることにする。

8:30、ABC着。16:30、BC着。

登頂断念

吉見敦司

8月10日、前日の偵察で好感触を得ていた私は、この日に賭けていた。残された時間はあとわずかだ。そろそろ稜線に抜けなければならない。今年のトムールは好天が続かないことを考えると、この日が実質的なタイム・リミットといえた。その夜の眠りは浅く、何度か目が覚めた。

朝、外は星がきらめいている。雪壁にもガスはない。ABCで雲ひとつない朝を迎えるのは初めてだ。やった！この瞬間をどれだけ待ったことか。気持ちの高揚を感じながら、出発の準備にかかる。朝食は、大事に取っておいたちらし寿司だ。だが、中里の調子がおかしい。頭痛と吐き気がして食えないという。その表情が、前日、不安げに雪壁を見つめていた顔と重なり合う。その日の快晴は、珍しく日中ずっと続いた。まだ時間はある。

もう1日晴れてくれたら、という思いをよそに、寝支度を始める頃から強い雪が降り始めた. . . .

朝になっても、テントを叩く雪の音が止んでいない。降り積もった雪がテントを圧している。外の様子を確認しなければと、固く結ばれたテントの入口を解きながら、分かりきった結果を想像して、絶望感に襲われる。外の積雪は40cm以上。3回のトムール遠征でこんなに積もったのは初めてだった。雪崩の巣窟の雪壁に40cmの雪。おまえらもう終わり！とととと帰れ！そう宣告されたに等しい。昨日稜線に抜けていたら、と思わずにはいられない。なぜこうもめぐりあわせが悪いのか？ 遭難した3人が、こんなやばいところには来るな、と言っているのだろうか。だが、まだ終わりがたくなかった。アタック期間中すべて好天という条件なら、13日まで待てる。それまでに雪壁の雪がおちついてくれたら. . . .。ゼロに近い可能性でも捨てられない。ABCにくぎづけにされたまま、まだ何もしていないのだ。だめだとわかっている、無駄な努力がしたかった。

13日、頂上に行けるだけの装備と食糧を持って、雪壁に向かう。荷の重さが空しさをおおる。陽が出ると、雪壁も周りの山も紅く輝き出す。国境稜線が見える。あそこから見おろす景色は、どんなにすばらしいだろう。昨日の到達点に着く。思えば、昨日、基部までのつもりが、気づいたらがむしゃらにラッセルしていて、こんなところまで来ていたのだった。同じ場所で、同じ作業を、ほとんど儀式のようにすませ、BCにアタック断念を伝える。危険を犯してもいいから登りたいという思いが、私をしばらくその場にとどまらせた。稜線はすぐそこに見えるのだ。このまま登り続けられれば、午前中には抜けられそうだった。

大量のABCの荷を無理やりザックに押し込み、雪壁に向かって手を合わせ、ABCを後にする。何度も振り返って雪壁を見上げる。今度来るときは登らせてくれ、と念じながら。



8/13、5300m地点より上部稜線を望む

8/14 BC 晴れ

朝食後、カーターの整理をして、荷をまとめる作業をする。午後は、中里の髪を切ったりして、暇をつぶす。

中里は何を思ったのか、頭をつるつるに剃り上げ、キラーカーン（自称モンゴル人の元プロレスラー）のような風貌になった。

8/15 BC 曇り後雨後晴れ

馬が上がってくるのが明日で、暇を持って余し、洗濯をするもの、ギョウザづくりに精を出すもの、惰眠をむさぼるもの、それぞれである。

8/16 BC 晴れ後曇り

あきらめのつかない吉見は、トムールの南東面のルートを探察に行く。他のものは荷物整理などして過ごす。

BC最後の夕食は、両胡氏が腕をふるった料理と白酒で、盛大な宴会となる。胡氏と一気飲み競争をはじめた中里は、酔って胡氏や

吉田に暴言を吐いた。さらに泥酔した中里は、これまで内に秘めていた思いを爆発させて泣きわめき、馬方のトゥディに慰められていた。

酔いが醒め、我に返った中里は、吉見や田村に、自分の装備やチベット行き餞別を配るのであった。

8/17 BC→3000m 晴れ後雨

いよいよBCを後にする日となった。カーターを整理して、ゴミを処理する。ハイピー・シートをトゥディにあげると、胡氏が「オレによこせ」と奪い合いが始まった。

10:00に出る予定が、結局12:10になる。レリーフに手を合わせて、出発。道を熟知しているケンジを先頭に進むが、他の馬方がついてこない。2400mまで下るつもりだったが、出発が遅れた上に、ペースが遅く、3100m下の草地までとする。

20:25、3000m着。入山時は花盛りだったこの辺りも、草木が黄色くなり始めており、冬が近いことを知らせてくれる。

8/18 3000m→2100m 晴れ

田村と両胡氏は、9:00、一足先に出発。他の隊員は馬に荷が積まれたのを確認してから、9:50、出発。2400mの川には立派な橋がかけられていた。2100m手前の急登を登りきるころ、先に着いたケンジが馬を連れて迎えにきてくれた。

17:30、2100m着。登山協会の車はまだ来ていない。張氏のスイカが待ち望まれたが、いくら待てど車は来ず、しかたなくテントを張って2100mに泊まるはめになった。

8/19 2100m→アクス 晴れ

昼近くなっても車がくる気配がなく、待ちきれなくなった吉田が、中里とともにタカラクに連絡に下り、ケンジ宅を訪問する。今日もここで泊まるのか、と諦めかけた18:30、ようやく迎えの車が来た。急いでパッキングし、トラックに荷を積んで19:30、2100mを後にする。

ケンジ宅に先に向かうため、ウイグルの馬方たちの集落を通り越そうとしたところ、彼らの給料を払わずに逃げるのだと勘違いし、怒り狂った馬方たちが馬で道を封鎖し、すさまじい剣幕で張氏に食ってかかってきた。いくら説明しても彼らの怒りは静まらず、その怒りの根はもっと深いところにあるように思われたが、張氏は夜を徹して彼らを説得する。

そんなことは露知らず、ケンジ宅は酒宴が盛り上がっている。23:30、ケンジたちに別れを告げ、暗い道をアクスへ急ぐ。1:30、アクス賓館着。

8/20 アクス 晴れ

午前中は、時間をかけて積み積もった垢

を落す。午後から民族大樓でウイグル、キルギスなどの民芸品を買い出し、登山協会でカートン整理をする。23:00ごろ、馬方たちから解放された張氏が帰ってきた。彼の頬には痣があった。馬方の1人殴られたらしい。殴った馬方は、辺境警察に逮捕され牢屋にぶちこまれたとのことだ。

チベット行きを予定していた田村と吉見は、中国ビザのこれ以上の延長が不可能と知り、急きょパキスタン行きに変更し、カシュガルまでの車をチャーターする。

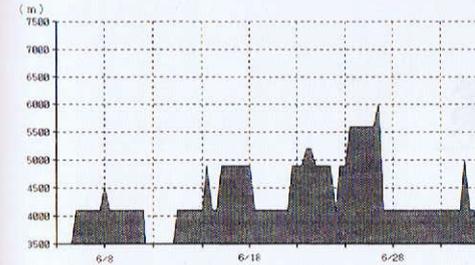
8/21 アクス 晴れ

田村、吉見は、9:00にカシュガルへ出発。残った吉田と中里も23日にはウルムチに向かうこととなり、登山隊はひとまず解散する。

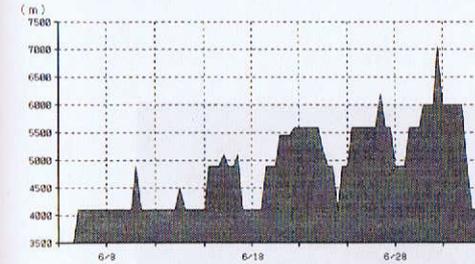
登降図

1. ムスターグ・アタ峰

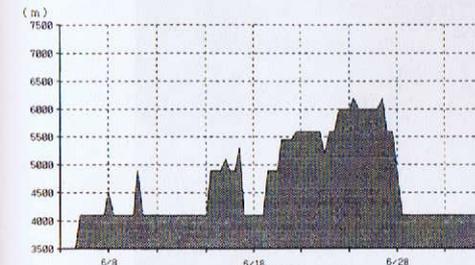
(吉田 宣明)



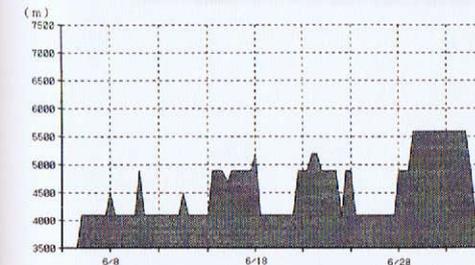
(吉見 敦司)



(中里 雄一)

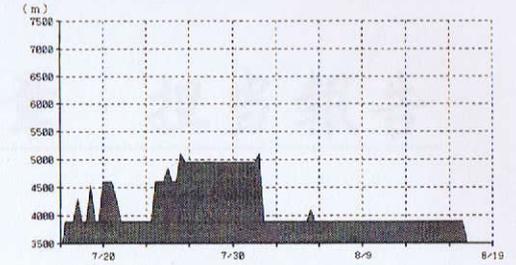


(田村 康一)

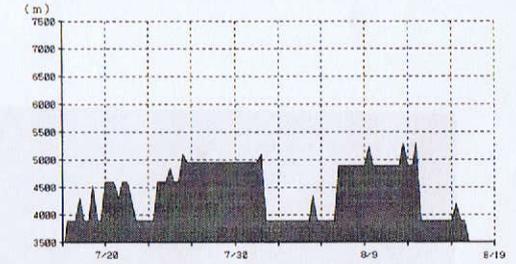


2. トムール峰

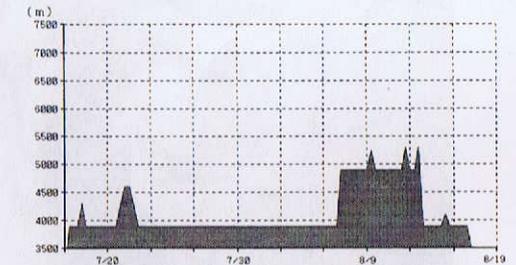
(吉田 宣明)



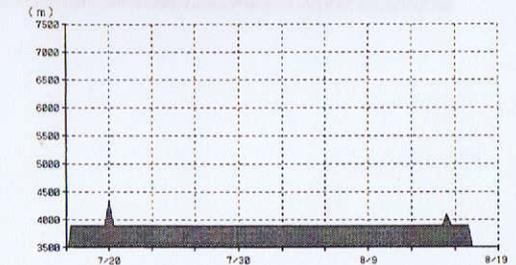
(吉見 敦司)



(中里 雄一)



(田村 康一)



担当報告

1. 装 備

吉見 敦司

今回は貧乏隊ゆえ、支出を最大限に抑えることを主眼におき、手元にある装備をなるべく生かせるよう、登攀のタクティクスを組む段階から配慮した。最もコストがかかり、輸送面でも問題となるEPIガスは、前回、前々回アクス登山協会にデポしたものを使うことにした。

その他の消耗品についても、探検部OBの大野氏よりアルカリ電池を寄贈して頂いたり、中国で購入できるものは現地購入にするなど、コストダウンにつとめた。今回最も支出の大きかったのは、雪崩探知機のビーコンだが、これも購入せず、レンタルするにとどめた。

1) 登攀具

今回は登攀らしい登攀はしなかったため、ロープもアンザイレンに使用したのみ。ムスターグ・アタではFIXの必要はなかった。

入手が難しいと聞いていた竹竿は、カシュガルのデパートに売られていた。だが、やはり竹竿は氷には刺さらず、トムールのセラック帯、雪原などでは使えなかった。

2) 火器・燃料

BCではMSRコンロ、CI以上はEPIの予定だったが、トムールではすべてEPIを使用した。MSRや中国製のガソリンに問題があったわけではなく、デポしておいたEPIがかなりあったので、つい横着をしただけである。

3) 露営具

遠征期間が3カ月と長いため、隊員の精神衛生が保てるよう、BCのテントを各自一つずつとした。私としては、口うるさいY氏から逃れることができ、大変ありがたく、幸せなBC生活を送ることができた。

4) 個人装備

最近、プラスチック・ブーツの強度が問題となっているが、我々の遠征期間中にも、ほとんど使用していない中里のプラ・ブーツ(スカルパ)に亀裂が入るという事故があった。予備を持ってきていたので事なきを得たが、長期の遠征では予備が必要だろう。

トムールの雪壁対策の一つとして、雪崩探知機のビーコンを持っていった。幸い、行動中にそれを使用するようなことは起きなかったが、うまく扱うには多少の訓練が必要で、ムスターグ・アタのBCで休養日などに練習した。

共同装備リスト

品 名	規 格	数 量	備 考	
テント	ダンロップ 4人用	3		
	エスペース ジャンボ	4人用	1	
		2・3人用	2	
	ゴア・テント 2人用	2		
	3m	10		
テントマット		1		
テントリペアキット		2		
スコープ		1		
EPIコンロヘッド	BPSA	3		
	BPS	100		
EPIガスカートリッジ		9		
ライター		15		
ローソク		2		
コンロ MSR		2		
シグボトル		2		
EPIランタン		10		
EPIランタンマントル		2		
ハイピーシート		800		
アルカリ電池		40		
ペグ		4		
コッヘル	M	3		
ポリタン	3ℓ	2		
ジョーゴ		5		
クライミング・ロープ	8mm x 100m	2		
	7mm x 50m	1		
	4mm x 50m	4		
アイスパイル				

品名	規格	数量	備考
アイスハーケン		20	
ロックハーケン		10	
スノーバー		30	
ユマール		4	
カラビナ		15	
トランシーバー		4	
高度計		1	
温度計		1	
双眼鏡		1	
ビニール袋	L	60	不足
	S	40	
ガムテープ		10	
スポンジ		3	
トイレットペーパー		30	
洗濯ばさみ		30	
ビニールロープ		1	
針金		10m	
ラジオペンチ		1	
六角レンチ		1	
マジックインキ		5	
割箸		20	
裁縫用具		1	
ボールペン		5	
はさみ		1	
輪ゴム		1	
たわし		3	
鉛筆		5	
ノート		2	
缶切り		1	
まな板		1	
ふきん		3	
包丁		2	
金やすり		1	
軍手		4	
カッター		1	
予備スパッツ		3	
予備テントポール		2	
蛍光テープ		3	
リペアテープ		2	
スノーソー		1	
ツェルト		2	
P. Pバンド		1	

現地購入品リスト

品名	規格	備考
ガソリン	30ℓ	
竹竿	50	
トイレットペーパー	50	前回より質が向上しており、お尻も拭けた。
BC用サンダル	4	
石鹸	2	
洗濯用石鹸	1	
シャンプー	2	
フライパン	1	
洗面器	2	



カシュガルのバザールで装備・食糧の買い出し

2. 食糧

中里雄一・吉見敦司

1) 計画

今回は経費削減のため、登山隊用のコックを雇わず、BC食も我々で作ることにし、その主食以外の材料は現地で調達することにした。C1以上はアルファ米とフリーズ・ドライ食品を中心に計画した。フリーズ・ドライは今回も(株)ホーリンにお世話になった。行動食は前回の余りも使って(2年前のものなので味の低下は激しかったが)、種類を多くし、飽きがこないようにした。

2) 遠征期間中の食生活

考えてみれば、男4人だけでたいした料理が作れるはずもなく、中国側のコックにしばしばごちそうになった。彼らの作る料理はとてもうまいのだが、いかんせん中国的、新疆的味付けであり（胡氏は四川風一本やり）、日がたつにつれ、しょうゆ、味噌以外の日本の味も恋しくなる。トムールのBCで、カシカール隊にお願いして分けて頂いたソースとマヨネーズを、お好み焼きにぐちちりかけて食べたときは昇天しそうになった。

C1以上のメニューは十種類程あったが、それらは当然のごとくBCのメニューにも使用され、遠征が長期にわたったのですこし飽きてしまった。

3) 反省

ムスターグ・アタで食糧計画にミスがあることが判明した。主食がかなり不足していることがわかり、中国側に分けてもらってなんとかしのいだだが、大変迷惑をかけることになってしまった。

メニューについては、計画段階では十種類もあれば十分だと思っていたが、さすがに三ヶ月となると足りないようだ。だが、我々には十種類以上のメニューを作りこなすのは無理だったかもしれない・・・。

食糧リスト

品名	数量	品名	数量
アルファ米赤飯	56	お茶漬の素	84
アルファ米白米	208	スパゲティー	2
海苔	26	ちらし寿司の素	5
味噌汁	120	FD牛肉	20
もち	84	豚肉	20
缶詰	30	豆腐	20
海苔佃煮	3	納豆	30
コンソメ	114	ねぎ	20
ビーフン	18	キャベツ	20
マーボ春雨の素	8	人参	30
チーズクラッカー	8	たまねぎ	20
塩	4	ミックス・野菜	20

品名	数量	品名	数量
カロリーメイト	150	FDほうれんそう	20
レトルトうどん	32	全卵	20
スープ	84	ひじき	8
蟹玉の素	8	おから	8
コンビーフ	20	きんぴら	8
カレールー	10	焼鮭	10
シチュールー	10	わかめ	2
ソーセージ	16	ジフィーズ鳥飯	8
ラーメン	32	山菜飯	8
プリンの素	4	チキンライス	8
ゼリーの素	4	中華どん	8
コンデンスミルク	7	乾燥醤油	100
ワカメサラダ	4	ふりかけ	5
スポンジケーキ	20	チョコレート	20
フィッシュナッツ	20	かりんとう	5
ゼリー	10	ピーナッツ	10
ザ・カルシウム	60	バームクーヘン	10
ビスケット	30	ババロア	5
クッキー	30	紅茶	150P
せんべい	20	コーヒー	1
ようかん	10	お茶	50P
あめ	5	砂糖 (スティックシュガー)	500本
クラッカー	10	ココア	3

現地購入食糧リスト

品名	数量	品名	数量
ワイン	2本	卵	10個
ブランデー	1本	ヤギ	3頭
たまねぎ	10kg	紅茶	1袋
じゃがいも	10kg	緑茶	1袋
人参	10kg	ジャスミン茶	3袋
にんにく	1kg	チョコレート	1kg
いんげん	5kg	ビスケット	10箱
ピーマン	5kg		

3. 医療

吉田 宣明

1) 内科系

○下痢（及び発熱）

全ての隊員に起きた症状である。何度か中国に来たが、都市部での食事・登山期間中の水のいずれかに起因したものがほとんどである。

発熱を伴うのはまれで、抗生剤にて対処した。

○高度障害（軽度肺水腫）

隊員Nがムスターグ・アタで発症、既往者となったためトムール登山のことも考え、慎重に扱う。原因は初高度である6000m付近での数日の停滞と考えられる。

咳タン共に激しく、歩行にすら困難をきたす。頭痛、吐き気あり。BC（約4100m）に下ろし、安静を保つ。数日間休養した後、回復する。

○高度障害（亜急性高山病？）

隊長Yがトムール峰5000m付近に1週間停滞後の移動時に発症する。頭痛、吐き気、運動障害の症状をみるが、病名は特定できず。BC（3900m）に下ろし、安静を保つ。BC下山後、1～2週間で回復する。

○A型肝炎

隊員Yが発病。登山隊解散後の単独パキスタン行中の出来事であり、医療係としては何もすることができず、報告のしようがない。愚かの一語である。

帰国後、3週間入院し、退院した後、約半年間の自宅療養を経て完治に至る。

2) 外科系

○膝関節捻挫＋靭帯損傷

隊員Tがムスターグ・アタにてクレバスに落下、足をとられ送屈曲となり、歩行困難となる。湿布等を施し安静とするが、以降の登山活動には参加できず。無残である。

帰国後、外科・整体治療によりほぼ完治する。

3) その他

トムール登山中、近くのカシカール峰登山隊の1人に急性高山病及びその後の対処ミスに起因すると思われる肝障害が発症した。携帯用酸素ボンベの提供等の要請を受けたため、患者の搬出や装備の提供・貸与といった協力を行った。

アクスへ下山後は一命とりとめられたようであり、帰国後本人より礼状をいただく。

4) 総括

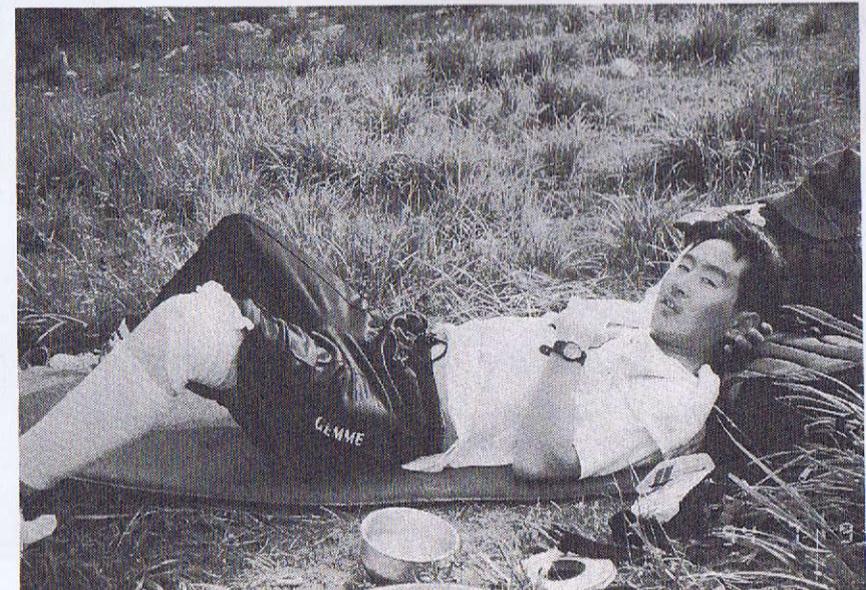
高度障害の対策としてダイアモックスの事前服用を試みたが、効果のほどはあまり実感できなかった。

遠征期間中をとおして、高度障害による呼吸器障害、内臓疾患、怪我等が多く、少人数の隊だけにその一つ一つが登山活動の進捗に影響を与えた。

悪天候等により高度順化がうまくいかず、何らかの高度障害を訴える者が多かったが、幸いにして致命的な症状には至らなかった。これは、風邪薬等入眠剤入りの薬品の服用を最小限に迎えたこと、また、高度障害の兆候がある者を即刻下山させたこと等が原因と考えられる。

ただし、カシカール隊の例をみるまでもなく、一般に高度障害による疾患は対応が難しいとされているため、今回の我々が重病者をださなかったのも、運によるところが大きいのかもしれない。

トムールのキャラバンで膝痛に苦しむ田村



4. 輸 送

田村 康一

1) 中国への輸送

今回の遠征期間は3カ月と長いものの少人数の隊であり、フィックスロープ等の登攀具の持ち込みを極力制限したために、全体の輸送重量が約480kgと少なかった。よってウルムチまでの輸送は、92年の遠征と同様に空輸でおこなうものとした。

なお、毎回問題となるガスボンベ等燃料については、アクスに大量のEPIボンベを残置してあり、ガソリンは現地調達としたことから、今回は輸送の対象とならなかった。

装備、食糧等の隊荷は4月の下旬までに市大の山岳部部室に集め、探検部員等の手を借りて梱包した。ちなみに隊長の吉田は、社員旅行でサイパンにでかけており、このときの集荷・梱包作業には全く携わっていない。

カートン数は全部で17個、その内訳は以下のとおりである。

規格カートン(60×50×40cm)	14個
スキーカートン(180×40×15cm)	2個
予備タンポールカートン(120×15×80cm)	1個
合計	17個 (Net483kg)

通関等の手続きは前回同様、日本通運(株)横浜航空支店に依頼し、4月下旬に航空便でウルムチへと発送された。ウルムチからの輸送は新疆登山協会が担当し、我々のカシュガル到着(6月初め)前には、登山協会の倉庫へ搬送されていた。

また、カシュガルからムスターグ・アタ、アクスへの輸送はランドクルーザーで、アクス〜タカラク間はトラックでおこなった。

なお、日通への支払い内訳を以下に示す。

航空運賃料金	343,000円 (710円/kg)
通関料・手数料等	45,000円
	<hr/>
	388,000円

2) 中国からの返送

92年遠征の際には、何度も催促したにもかかわらず、新疆からの隊荷返送が1年以上遅れた。詳しい理由は不明であるが、我々の荷物は約1年にわたり、天津港の倉庫に眠っていたらしい。おかで一時は、今回の遠征の実現が危ぶまれたほどであった。

また、遅れた荷物も手違いで神戸港に到着したうえ、通関に必要なBill of Lading等の書類もなく、さらに92年の帰国の際に別送申告を怠っていたという我々のミスも重なって、通関には多大な労力を要した。

結局田村が神戸まで出向き、税関長に頭を下げてなんとか無税で通関してもらったが、神戸の通関業者の手数料(約10万円)等、無駄な出費を強いられた。

今回はそのようなミスがないよう、登山協会に厳重に申し入れをし、成田での別送申告もきちんとすませた。

その結果、アクスで梱包した隊荷は遠征終了後の94年11月に横浜港に送られ、横浜税関での通関手続きを経て、無事市大に到着した。現在は山岳部の新しい部室(グラウンド横に設置されたプレハブ)に保管してある。

なお、翌95年にトムールのBC訪問を予定している西堀さん(90年隊隊長夫人)一行のため、テント数張りとキャラバン用の生活用具をアクス登山協会に残した。



横転したトラックに行く手を阻まれ、立ち往生

5. 渉 外

田村 康一

1) 登山協会との交渉

新疆登山協会との交渉は主にファックスを利用した。しかし、受信は問題ないものの、こちらからの送信がうまくいかないケースが多かった。そのため、遠征間際にはもっぱらEMS（国際速達便）により連絡をおこなった。

EMSはウルムチまで3～5日で到着し、値段は1,000円弱と比較的使い勝手が良いものの、緊急の連絡の際にファックスがあてにできないのはつらい。もっとも、旅行社にファックス等の連絡を代行してもらった前回や、通常の国際郵便で気長にやりとりしていた前々回と比べると、格段にスムーズな連絡体制がとれるようになったのは確かである。

また、協会の窓口は日本語の達者なヌル氏が担当していたため、文書の中国語訳に煩わされることもなく、かなり細かいレベルの事前打ち合わせができた。

そのせいか、ムスターグ・アタの登山料及び環境保護料をタダにまけさせるなど、今まで中国側のいいなりだった費用面においも、ささやかながら我々の言い分を通せたのではないかと思っている。

2) 後援組織づくり

前回同様、母体となる組織をもたない我々にとって、遭難等緊急時の連絡や救援のための体制づくりは、必要不可欠な作業であった。幸い、田村と吉見の所属する市大探検探査の会（探検部のOB等が所属する任意団体）と山岳部OB有志に、それらの役割を引き受けていただけることになった。また、市大探検部を留守本部とし、緊急時連絡用の電話を設置した。

なお、上記の後援組織の方々からは、資金カンパ等の多大な援助・協力を受けたことを、併せて記しておきたい。

3) 物資提供等

撮影用ポジフィルムは神奈川新聞岸順之氏から、また、ネガフィルム及びアルカリ乾電池は高知大学大野正夫氏から、それぞれ全量寄贈していただいた。

また、梱包用資材は、浅野ダンボール（株）より格安で提供を受けた。

6. 会 計

田村 康一

1) 収 入

同じ山への3度目の遠征ということもあり、費用は原則として全額個人負担としたかったが、各隊員の懐具合を勘案すると1人当たり100万円が限界であった。計画当初の見積もりが500万円だったので、1人当たり約25万円の不足が生じる計算になる。

しかし前頁に記したように、後援組織の方々を中心に90万円近くのお金が集まり、物資の提供によって支出も抑えられたせいで、個人負担金は90万円、隊の総収入は約450万円となった。

それでも、蓄えのなかった吉田は翌年にまたがる分割払い、田村は勤め先を辞めた退職金で、負担金をひねり出すという厳しい状況であった。

2) 支 出

国内支出は、少人数のセミアルパインスタイルの隊であること、前回遠征までの装備がほとんど使えたこと等で、装備を中心にかなり節約できた。その結果、92年隊の半分弱に国内支出を抑えることができた。

中国国内の支払いは、92年隊と比べて隊員が減った（7→4人）ものの、遠征期間が延びた（1.5ヶ月→3ヶ月）分が相殺されて、前回同様の約300万円となった。

今回は、ムスターグ・アタの登山料・環境保護料をまけさせる（注）など、交渉によってある程度のダンピングができることがわかった。しかし毎度のことながら、車両費及び人件費は中国の物価・給与水準等から考えると高すぎると思う。なんとかならないものだろうか。

注：我々は今回、ムスターグ・アタ及びトムールで1本のフィックスロープもハーケンも残置していない。また自らの負担によって、燃えるごみは焼却し、燃えない空き缶・瓶・ボンベ等は全量持ち帰っている（但し糞尿は除く）。環境保護料を値切ったからといって、我々は決して現在の登山界の潮流であるテイクイン・テイクアウトの思想に逆行しているわけではない。

■ 途中下山

1990年夏のトムール遠征で、かわいい後輩が1名「肛門周囲膿腫」という、人に顔向けできない程情けない理由で登山活動から離れていった。つまり、「ちろう」で足腰立たなくなったわけである。そのみじめな姿をこれみよがしに指さし、ギャグのネタにして大衆の笑いをとったのは私であった。

そんな私も元来胃腸が弱い。日常生活では2回に1回は下痢で、便秘になるのは3年に1度ぐらいである。油料理の多い中国へ来ると、そんな吉田の腹の中は自動血洗い機のようにになってしまうのだ。

そんなわけで、1994年6月9日、発熱及び左臀部にシコリ発生。抗生剤を服用するが痛みは増し、熱は続く。恐れていた「肛門周囲膿腫」が発症したのだ。私の頭の中に、まるで4年前の私のように指をさす、田村の容赦のない嘲笑がこだました。

「動けなくなったらおしまいだ。第2のN易にはなるものか」。私は治療に最善を尽くす決心をした。「下山するしかない。医者に治してもらおう」と。

吹雪の中、BCを後にする哀愁漂う吉田に、3人の隊員はあざけり笑いの代わりに手紙とはがきを託してくれた。

カシュガルの郵便局でポストに投函するようにと・・・。

(吉田 宣明)

■ 女子留学生

ムスターグ・アタの高度順化を終え、カラクリ湖畔で昼食をとっていた時、2つ向こうのテーブルから、私たち4人以外の日本語が聞こえてきた。京都山岳会のA氏の講釈を聞いていたのは、新疆を旅行中の2人の日本人女子留学生、大海さんと有馬さんだという。

帰路、登山協会の粋なはからいによって、彼女たちとカシュガルまで同乗できるのは、その社交性が大いに期待される田村であった。

田村の努力の結果、カシュガルのホテルでは彼女たちを含めた6人で楽しい夜となった。仲間がいると俄然強気になる田村の舌のなめらかさは目を見張るものがあったが、修行僧のような吉見と、物言わぬ牛馬の如き中里は、ただっ広い空間を埋める役目のみを担っていたといえよう。

しかし、吉田を除いた独身3人組の心の内は明らかに一致していたようだ。彼女たちの気を引きたいのはわかる。しかしそれは余りに虚しい努力だ。なぜなら、ナイスでウィットに富んだ上に、アミューズな会話を駆使する吉田の存在が、彼女達の心を奪ってしまったに違いないのだから。

(吉田 宣明)

■ ウイグルの結婚式

カシュガル登山協会の通訳チョウさんは、達者な日本語を駆使して憎まれ口をポンポンたたたく、なかなか愉快な男である。

日本から来る登山隊は年配者が多いようで、「いつも年寄りのお守りで苦勞する」と嘆くチョウさんだが、比較的年齢の近い我々とはウマが合ったのか、友人のウイグル族の結婚式に連れていってくれるという。

夕方4時頃、貸し自転車に乗ってカシュガル東湖そばにある新郎の実家へ到着する。低いレンガ積みのでんぐらに囲まれた、小ぢんまりとした家だ。前庭には葡萄棚があり、申し訳程度の木陰をつくっている。

ご祝儀に1人百元(約1200円)を包み、客間に通される。ナンやポロ等の料理をご馳走になるが、来客もまだ少なく、宴はこれからといったところか。一旦中座し、古墳を探しにいったりして時間をつぶす。

夜9時過ぎ、再び新郎宅へ行く。既に宴は最高潮の盛り上がりであった。前庭では楽隊の奏でる旋律に合わせて、赤ら顔のウイグルの男たちが手に手を取り合ってクルクルと舞い踊っている。

お札で踊り手の頭を2~3回撫でて、それを楽隊に献じると幸運を招くという。私も20元程寄付をする。宴の主役である新郎は、その作業にもう何百元も費やしている。

踊りがクライマックスに達した10時頃、花嫁を迎えに出発する。新郎が乗るベンツをはじめ、親戚用のマイクロバス等7~8台の車に出席者が分乗し、いざ花嫁の実家を目指すのだ。我々もなぜか、楽隊の乗った先導車に同乗して、カシュガルの町中をパレードするはめとなった。

夜の10時過ぎ(北京時間)とはいっても、新疆ではまだ明るく、町の中心部はそれなり

に車が走っている。しかしそんなことにはお構いなく、新郎一行は赤信号を無視し、対向車を蹴散らして進む。楽隊も途切れることなく、下手くそなトランペットを吹きまくる。なんでも、車や演奏が止まると縁起が悪いのだが、これでは交通法規も秩序も何もあったものではない。

この日は日曜日で、町では他にも何組かの結婚式があるようだ。同じようなパレードの団と何度かすれ違う。かなり疲れのみえる我らがトランペッターは、その度に対抗意識を燃やして肺をフル稼働させるのだが、それはもはや、ただの騒音と化してしまった。

辺りが暗くなりはじめた11時頃、ようやく花嫁の自宅に到着する。新郎が先陣をきって新婦宅に乗り込み、我々を含めた周りの有象無象たちも後に続いて突入する。

混乱のさなか、純白のウエディングドレスに身を包んだ花嫁が母親とおぼしき女性に手を引かれ、泣きながら家をでてきた。ウイグルの結婚式では、花嫁の涙は“お約束”らしい。

花嫁は迎えの車に乗って新郎宅へ向かい、何ともおおらかで派手なウイグルの結婚式は、幕を閉じるのであった。

(田村 康一)

■ ファンジェラープ峠越え

8月下旬、3度目のトムール挑戦に失敗した私と吉見は、その感傷に浸る間もなく、陸路パキスタンをめざして急いでいた。悪天候で遠征の日程をギリギリまで使ってしまったため、中国の滞在期限はあと僅かしかない。

住所不定、無職の立場で遠征に参加した私は、日本から中国への片道航空券しか購入しておらず、帰国もできない。おまけに8月25日を過ぎると、事前に取得していたパキスタ

ンのビザの有効期限が切れるため、下手をすると第3国へ出国できずに、中国の不法滞在者になってしまう恐れがあったのだ。

8/22、カシュガルで借りたランドクルーザーは、ムスターグ・アタやコングールの麓をぬって快適に走る。我々2人に加え、カシュガルで相乗りを申し込んできた日本人旅行者3人組、そして運転手とその友人らしき謎の男の計7名が車中の人となった。

途中、国境越えの乗り合いバスを軽く抜き去り、中国最果ての町、タシュクルガン(3500m)へ夜8時頃に到着する。今夜はここで泊り、翌日出国審査を受けて中国とはおサラバだ。なんとか、査証期限切れの前にパキスタンに入国できそうである。

翌朝、ホテル横の税関で出国手続をすませ、「さあ出発」と思ったら、運転手が通関できないという。聞けばパスポートの期限がとうに切れているらしい。高いお金を払って雇った男なのに、一体どうしてくれるのだ。

遅れて到着した乗合バスの乗客も皆手続きを済ませて出発し、税関も閉鎖されてしまい、かくして我々一行だけがとり残された。

一瞬途方にくれかかったが、車に同乗していた謎の男が「免許を持っている」というので、その真偽はともかく彼をドライバーに仕立てあげ、12:15、なんとか出国にこぎつけた。

ここから中パ国境のフンジェラール峠へは何度か川を渡り、徐々に標高を稼いでいく。峠に近づくとつれ傾斜がきつくなり、次第に悪路となる。道路脇の草地では、カラスに追われたタルバガン(マーマット)が巣穴に向かって必死に逃げていくのがみえる。

14:30、フンジェラール峠に到着する。標高4700mというが、3ヶ月間みっちり高所訓練を積んできた私と吉見にとっては、何ということはない高度である。しかし、同行の3人

組にとってはしんどいようで、車が止まるたびに下痢や嘔吐を繰り返す者もいる。

国境の標識をバックに記念写真を撮って、出発。ここからはパキスタン領となり、カラコルムハイウェイを下っていく。道路工事中のパキスタン人は、ウイグルやキルギス族を見慣れた目には非常に大柄に映る。また、周囲の景観も中国側の穏やかな山容とは一変する。荒々しく鋭い岩峰が溪谷へと一気に切れ落ちている様子は、息をのむような迫力だ。

16:50、国境の町スストまであと一息といったところで、突然車が停車した。大規模な崖崩れがあったらしく、前方に何万トンもありそうな巨大な岩石が崩れ落ち、完全に道がふさがれている。旧式のショベルカーが悠長に岩を取り除いているが、作業は遅々として進まない。復旧の見通しは当分たないという。

度重なるトラブルに意気消沈する同行者らを尻目に、私はパキスタン側で立ち往生している車と交渉し、スストまでピストン輸送してもらうことにした。我等がランドクルーザーは、パキスタンに何やら用があったらしい代打運転手とともに、中国へ帰ってもらった。

18:30(パキスタン時間15:30)、車を乗り変えて20分ほどでスストへ到着する。

入国後もそのまま、フンザ目指して下る。右手にシスパーレ、左手にデュランを仰ぎみつつ、フンザのカリマーバードに到着したのは18:30。残照に染まったラカポシは、この世のものとは思えない程の美しさであった。

翌々日、フンザにしばらく留まるという吉見と別れ、私はギルギットへと向かった。

(田村 康一)

第6章 遠征を終えて



遠征を終えて

田村 康一

1. はじめに

遠征の総括は当初、隊員及び市大の山岳部や探検部OB諸氏による座談会形式の反省会を開催して、その内容を掲載する予定であった。しかし、報告書の編集作業が大幅に遅れたこと、帰国後の生活環境や人間関係の変化によって、隊員の4人ですら集まることが困難になったこと等により、そのプランは見送りとなってしまったことをはじめにお断りしておきたい。

報告書巻頭の吉田の挨拶文にもあるように、「3度目の遠征にもかかわらず結果をだせなかった」我々に、次のチャンスがあるのか否かは現時点ではわからない。しかし、今回の敗因を自分たちなりに分析して第三者の批判を仰ぎ、具体的な課題へと昇華させることは、周囲の人間を巻き込んで遠征を強行した我々にとって最低限の義務であり、また、いつの日か実現するかもしれない4度目の遠征を成功させるための必要不可欠の作業でもある。

というわけで、今回主に隊のマネージメントに関わり、報告書のとりまとめを担当している田村の視点から、この遠征の総括を試みることにした。

2. 高度順化

今回の遠征の売りであった「ムスターグ・アタ峰での高度順化」は、思ったような成果が得られなかった。当初全員が、6000m以上の宿泊高度による順化を目指したが、結果的にそれを達成したのは登頂した吉見だけだったといえる。

他のメンバーの順化が予定どおりにいかなかった理由は、以下のとおりである。

1) 吉田の場合

6000m(C3)への到達は1回、その際不調を訴え下山したため、結局6000m以上の宿泊は0回である。

登山活動の前半で痔漏を患い、カシュガルに下山したこと、また後半では、肺水腫の疑いがあった中里に医療係として付き添ったことが、吉田の上部でのステイが不十分だった原因である。

2) 中里の場合

C3での宿泊は3回、また、6200mの高度に2回達している。しかし、初高度の6000mでうまく順化できなかったために、肺水腫のような症状を訴え、結局体調を崩したまま下山するはめとなった。

原因としては、C3で不調だったにもかかわらず、交信では「絶好調です」と偽り、下山しなかったことが挙げられる。

3) 田村の場合

6000mへの到達は1度もなく、5600mでの宿泊が3回のみである。期間中特に体調を崩すようなことはなかったが、ザックの故障やパートナーの不調等により、高度を稼ぐ機会をことごとく逸した。

吉見と胡のアタク中には、BCとの無線の中継係(C3より上部ではBCに電波が届かなかった)をやるはめとなり、5600mのC2で釘づけにされた。

以上、個別の原因について列記してみたが、この順化計画がうまくいかなかった根本的な原因は、以下の2点に集約されると私は考えている。

① 目標を全員登頂としなかったこと

② 連絡官の胡に足を引っ張られたこと

①についてはいうまでもないことだが、7500m(実際は7000m強?)の頂上を目指すのと、6000m辺りのキャンプでの宿泊を目標とするのでは、自ずから意欲や気迫が違ってくる。

ムスターグ・アタは登頂した吉見が記しているように、長大な尾根が続く「全く登攀意欲をそそられない」山だが、やはり、トムールに向けてより高所での高度順化が望まれる状況にあっては、全員登頂を目標とし、それに向けたタクティクスを用意すべきであった。

②はつまり、本来連絡官として我々の遠征を側面から支援するはずの胡の登山隊員としての参加が、様々な局面で我々に悪影響を及ぼしたということである。

過去の遠征で凍傷により両足先を切断した胡は、本来登高スピードが遅い上に、スキーがはけない。おかげで、C1より上部のクレバス帯は我々もスキーを脱いで、胡のためにラッセルを強いられ、余分な体力と時間を消費した。

また当初、「装備は別々」との約束だったが、ほとんど個人装備しか背負えない胡がテントや食糧等を荷揚げできるわけもなく、C2より上部ではなし崩し的に我々のテント、食糧を借用していた。

これは、胡が「消息不明事件」を起こした後の下山時も同様であった。おかげで我々は、1日停滞を強いられた上に、C2及びC3の全ての荷を吉見と2人で荷下げるはめとなり(空身の胡は尻セードでさっさと下っていった)、それが私の負傷の間接的な原因となったのだから、泣くに泣けない胡のスタンドプレイである。

今となっては後の祭りであるが、全員登頂

という強い目的意識を持てば、胡の野心(障害者である胡の7000m峰への登頂はビッグニュースであり、ウルムチの新聞に大きく掲載された)にも付け入るスキを与えず、自分たち本位の登り方でトムールに向けての高度順化ができたのではないかと、悔やんでいる次第である。

3. 気象

最も天候が安定しているといわれる7月に登山期間を設定したトムールであるが、キャラバンから登頂断念に至るまで、悪天候に泣かされる結果となった。

1) 悪天で大幅に遅れたキャラバン

まず、キャラバンでは、異常な高温による氷河の融解(これは日本でも報道されたい)によって川が増水し、2日間を橋造りに費やした。また、雨も多く、豪雨によって2日間の停滞が加わり、悪天により計4日の停滞を強いられた。

これにより、「ムスターグ・アタで得た高度順化をもって一気にトムールを攻める」という当初のもくろみがくじかれ、各自の志気の低下を招いたことは否めない。事実、3100mでの降雨停滞後に、吉見と中里が体調を崩した(2日停滞)ことによって、3日を予定したキャラバンに都合9日間を要し、BC入りは予定より大幅に遅れた7/17となった。

2) 降雪で動けなかったABC

BC入り後、7/26に速攻でABCを建設したものの、ABCからのアルパインスタイルでの登頂を狙った吉田と吉見が、7/27~7/31の5日間、降雪によって停滞を余儀なくされた。

これは、「過去2回雪崩で敗退している核心部の雪壁では、降雪後行動しない」という

原則を貫いた結果でもあるのだが、雪壁上では、周囲が晴天にもかかわらず、ガスがかかって降雪に見舞われる状態が続いた。

条件の悪いABCでの停滞が引き金となったのか、吉田が体調を崩し、田村に続いて戦線を離脱した。これは、少人数の我隊にとっては致命的だったといえる。

その後、8/10～8/13にかけて吉見と中里のパーティが、ABCから再度頂上を狙った。しかし、8/10に巡ってきた千載一遇の晴天を中里の不調で逃し、翌11日の40cmの降雪で事実上のギブアップとなった。

今回の遠征で1番の誤算だったのは、トムールでの悪天候に尽きる。しかし、過酷な自然条件を克服することが、高所登山を成功させる重要な条件であるのだから、「天気が悪かったから」という一語でトムール敗退の原因を片づけるのは、あまりに安易な行為であろう。

我々は遠征期間中を通じて、アクス気象台からの天気予報をラジオで受信していた。しかしその内容は、「天山地方のこれから3日間の天気は雨多し、風速は5級」という大まかなものであった。

現在の技術では、BCにファックスを持ち込んで、日本からの高層天気図と専門家の予報を受信するというのも可能である。

たしかに、我々のような母体組織を持たない貧乏隊には、資金的・人的に難しい部分はある。しかし、前述のような方法によって予報がある程度の確度でできるようにすれば、「ABCでやみくもに天候の回復を待つ」といったスタイルではなく、もう少し柔軟なタクティクスが組めるのではないだろうか。

私自身、気象に関する知識がほとんどないのでこれ以上の言及は避けるが、今後一考を

要するテーマではあると思う。

4. 隊編成

1) 中里の参加について

今回の遠征は、1990年から3回目のトムールとなる横浜市大の吉田、吉見、田村の3人に、亜細亜大の中里が加わった4人パーティであった。

中里は、亜細亜大の山岳部をはじめ、日本山岳会や都岳連、CMC、YCC等色々な山岳会に首を突っ込んでいるというタイプのクライマーで、「マッターホルン北壁単独登攀」等の肩書きを引っ提げ参加してきた。

しかしゲレンデでの実力はともかく、高所の経験は日本山岳会学生部隊でのムスターグ・アタ(6000mまで)のみである。過去何度かの高所経験を積んでいる市大の3人とは、モレーンでの歩行、クレバスの対処法といった基本的な技術面で、かなりの差があったのは否めない。

そんなギャップを埋めようと、中里なりに頑張ったことは私も十分理解しているが、緊張感が持続できたのもムスターグ・アタまでであったようだ。

トムールでは完全にやる気をなくしたところを吉田に見透かさされ、怒りを買ったうえに、吉見と組んだ最後のアタックでは精神面でのモロさを露呈して、最後は完全に隊から浮き上がってしまった。

中里にとっては、ムスターグ・アタもトムールも、得意の登攀テクニックを発揮できるような山ではなく、その意味では彼にとっては不幸な遠征だったといえるかもしれない。

帰国後、我々と中里の間には様々な感情的な行き違いがあった。そのせいか、たびたび催促したにもかかわらず、中里は報告書の

原稿を送ってよこさなかった。従って、このレポートに彼の文章が掲載されていない旨をご了解いただきたい。

2) 吉田のリーダーシップ

前述の中里を隊に引っぱってきた張本人であり、また一番最初に見切りをつけたのもこの男である。

これは本人も認めるとおり、「中里の一件については吉田の責任」といえるだろう。しかし、「どうしても4人編成にして、2パーティで行動したい」という思いが、門外漢の中里を参加させた動機であったには違いない。ただ誤算だったのは、中里には我々のようなトムールに対する思い入れも、身体を張って雪壁を突破する必然性もなかった、ということであろうか。

遠征準備段階における怠慢ぶりや傍若無人な振る舞いから、「ぐうたら隊長、理不尽隊長」等と呼ばれる吉田であるが、登山期間中の要所要所で「さすが隊長」という動きをみせ、なんとか帳尻を合わせていた。

しかし、隊長というよりも1クライマーという意識が強いらしい彼は、前回の遠征と同様、自分が戦線を離脱した途端、すっかりやる気をなくして、同じくBCキーパーであった田村の茶飲み友だちと化してしまった。

まだ吉見と中里が上部で頑張っていたのだから、隊長の肩書きを背負った以上、最後までBCで指揮権を発揮すべきだったと私は考えるのだが、いかがなものだろうか吉田先生。

3) 吉見、田村のパーティシップ

吉見はムスターグ・アタに単独で登頂し、トムールでも常に最前線で頑張った。しかし悲しいかな、そんな吉見をもってしても、トムールは1人の力で何とかできるような山で

はなかった。

他の隊員の不調や悪天候等、本人の頑張りとは無関係な要因による敗退に、さぞや悔しい思いをしただろうと想像する。

私田村にとっては、前半戦の負傷が全てである。私のリタイアによって、トムールでは1パーティしか機能せず、皆の足を大きく引っ張った。役割を全うできず、大変申し訳なく思っている。

5. まとめ

事前の順化不足、悪天候、隊員のケガや病気、チームワークの乱れ等、失敗につながったであろう要因をいくつか挙げてみた。しかし、このような問題は我々に限らず、どこかの遠征隊においても多かれ少なかれ内包していることである。

要は様々な悪条件を乗り越え、結果を残せるか否かであり、それを左右するのが個々の隊員の情熱や意志の強さ、登山者としての実力といったものなのだろう。我々が今回、幸運を引き寄せられなかったのは、それらが不足していたせいだと私自身受けとめており、隊長の吉田の見解も同様であるようだ。

今後、4度目の遠征が実現するか否かは、現時点では全くの白紙である。私は正直言って、今までのような短いスパンでの再チャレンジは考えていない。

しかし、何年先になるかはわからないが、各人がそれぞれの住む世界で、登山者として、そして人間としてのレベルアップを果たした暁には、また3人でパーティを組み、西堀さん、井上さん、伊東の魂が棲むトムールに挨拶にいきたいと考えている。

ただし、今度は違うルートから……。

資料編



■「'90・横浜市立大学天山トムール峰登山隊」の経緯■

1990年8月12日、「横浜市立大学天山踏査の会」が主催する登山隊として、トムール峰に遠征していた西堀秀二、井上誠、伊東昌彦の3名は、標高5800mの第3キャンプにおいて消息を絶った。以下は、同会から刊行された『'90・天山山脈トムール峰登山隊報告書』の内容を要約したものである。

◇ ◇ ◇

1990年7月14日、西堀登山隊長、伊東隊員他3名の先発隊は成田空港を出発し、同21日には標高3900m地点にBCを建設した。23日、C1予定地の雪原へ抜けるアイスフォール帯を突破し、翌24日には4550mの雪原上にC1を設けた。午後からの気温上昇に伴うアイスフォールの崩壊やヒドンクレバスに悩まされながらも、核心部の雪壁下部(5300m)までルートを伸ばしたのは、入山後1週間が経過した7月28日であった。

一方、井上登攀リーダーら後発隊10名(トレッキング隊6名含む)は7月21日に中国入りし、29日にBCで先発隊と合流した。

合流後の8月1日、雪壁基部のクレバス内(4980m)C2を設営し、上部攻撃への前進基地とした。翌2日は5750m、6日には稜線の最低コル直下の6000mまでルートを伸ばしたが、クレバス帯に行く手を阻まれたため、コルへの直上ルートを諦め、5800m地点まで引き返して幕営、仮C3とした。

8月7日、仮C3より出発した西堀ら3名は雪壁を大きくトラバースして上部のクレバス帯を迂回、その後直上して6450m稜線上に達した。C2からこのコルに1日で到達するのは時間的に不可能だと判断したルート工作隊は、雪壁上唯一の安全地帯であると考え

られた仮C3を正式にC3とすることにした。

8月11日、降雪による表層雪崩の危険のため、C3からのトラバースルートをとれなかった井上、田村康一、伊東の3名は最低コルへの直上ルートを再度試みたものの、急峻な雪壁を突破できず一旦C3へ下った。C3では第1次アタックを狙って上がってきた西堀、吉田宣明と合流して、3人しか収容できないテントに誰がアタック隊員として残るかを議論した。

結局、体調を崩していた田村に医療担当の吉田がつきそって下山し、西堀、井上、伊東の3名がC3に残留することが決まった。アタック隊を外れた吉田と田村は、その日のうちにC2へ下った。

◇ ◇ ◇

8月12日、C3に宿泊していたアタック隊からの連絡が途絶えた。C2の吉田と田村は状況を確認するため、5050mの雪壁基部に上がり上部を観察する。しかし、3人の姿やC3の有無は確認できなかった。吉田はBCの吉見敦司と高松康夫に至急C2へ上がるよう要請、翌13日から本格的な搜索活動を開始することに決めた。

8月13日、吉田と吉見は3人の生存とC3の有無を確認するため、雪壁の搜索をおこなった。雪壁の下部は11日以降新たに形成されたクレバスによってズタズタになり、巨大な雪のブロックが散乱していた。また、中間部にフィックスしたザイルは数百メートルほど流されており、スノーバーは「くの字」型に折れ曲がっていた。

降雪のなか、さらに搜索を続けるが、雪壁の様相は一変しており、上部雪原は雪崩に伴

うデブリによって埋め尽くされていた。吉田と吉見はすっかり幅広くなったクレバスを回りこみ、17時頃C3へ到着する。

そこには、巨大なブロック雪崩の跡と思われる雪塊が転がり、そのショックで陥没したらしい直径2メートルほどの穴が大きく口を開けていた。上部の台地は底なしのクレバスと化しており、周囲には3人の姿もテントも、何もみつけることはできなかった。

その後、中国人民解放軍の協力を得てヘリコプターによる空からの搜索をおこない、C2~C3間の雪壁もひきつづき搜索したが、3人の姿はおろか、手掛かりになるようなものは何一つみつからなかった。

状況的にみて、3人の生存は絶望と考えられた。すべての搜索を打ち切った登山隊は、8月28日、3人を残したまま帰国の途についていた。

注：登山隊の報告書及び3人の追悼集『天山に逝く』については、下記までお問い合わせいただきたい。

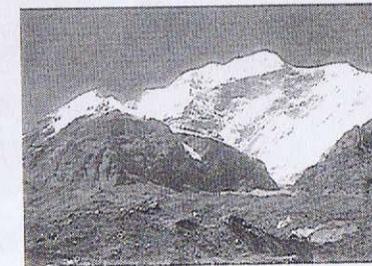
〒236 横浜市金沢区瀬戸22-2
横浜市立大学商学部大学院図書室
高松 康夫



天山に逝く

追悼

西堀秀二 井上 誠 伊東昌彦



天山に逝く 刊行委員会 編

1990年に雪崩で西堀隊長ら3人を失った横浜市立大学隊が、前回遠征のメンバーである吉田宣明をリーダーに、中国側南面ルートからトムールに再挑戦した。

なお、吉田以下6人の隊員は、横浜市大の山岳部、探検部、ワンダーフォーゲル部のいずれかに所属していた。しかし、大学当局の計画に対する承認が得られなかったために、「天山登山倶楽部」という任意団体を結成し、それを母体として遠征を実施した。

◇ ◇ ◇

1992年6月22日、成田空港より出発する。最も天候の安定するという7月下旬に登頂日を設定したために、前回より1ヶ月程早い出発となった。

6月28日にアクスを発ち、7月3日3900m地点にBCを設営する。モレーンでの馬方のストライキ等で、予定より3日程遅れたBC入りであった。

7/11、苦闘の末アイスフォール帯を突破し、4600mの雪原にC1を建設する。

7/13、5100m地点にC2を設け、核心部攻略の起点とする。スピーディな雪壁突破を図るため、C2は雪崩のリスクがある雪壁基部に設営した。

7/14、吉田と吉見敦司のパーティが前回遭難現場の5800m地点までルートを伸ばす。気温が上がる午後には、上部から落氷石あり危険。C1への下山中、吉田が足を負傷し、以後戦線離脱する。

7/15、田村康一、真庭博之、稲田俊の3名が吉田パーティに代わってC2に上がり、雪壁の突破を狙う。しかし同日、雪壁上部から発生した雪崩によってC2もろとも吹き飛ば

され、BCへの退却を余儀なくされる。

雪崩による被害は、テント、ヤッケ、シュラフ等の装備を紛失した他、田村が軽傷を負った程度で済んだが、隊員各自の精神的ダメージは思いのほか大きかった。BCでは登山を中止すべきか否かで意見が分かれるが、議論の末、活動続行と決定する。

7/19、田村、稲田、佐藤修史の3名が4900m地点にC2を再建し、雪壁の突破を試みる。しかし、翌20、21日と降雪に見舞われ、C2周辺では表層雪崩が頻発した。

雪崩に直撃されたショックに加え、悪天候による停滞が重なり、隊員の志気は著しく低下した。

結局、これ以上登山活動を続けるのは無理と判断し、7/22にBCへ下山、8/5には北京より全員が帰国した。

注：同隊の遠征報告書の問い合わせ先は、下記まで。

〒236 横浜市金沢区瀬戸22-2
横浜市立大学探検部

'92・天山山脈トムール峰 登山隊報告書



天山登山倶楽部
トムール峰登山隊

横浜市大O.B.登山隊が、中央アジアの高峰トムール峰(七、四三五四)の登頂を目指し六月一日、日本を出発する。四年前に雪崩で仲間三人を失って以来、今回が三度目の挑戦。四人という小規模ながら「今度こそ」の合言葉を胸に、熱き思いの登山隊だ。

横浜市大O.B.登山隊 トムール峰へ



吉田 宣明隊長

吉田宣明隊長(左)と横浜市保土ヶ谷区二と、吉見敦司(三)と横須賀市馬堀海岸、田村康一(二七)と横浜市港北区、中里雄一(二五)と東京・小金井市二の三隊員。中里さん以外は、市大山岳部・探検部のO.B.。トムール峰は、中国と旧ソ連国境の天山山脈の最高峰。一九五六年、旧ソ連隊が初登頂したが、市大O.B.隊が挑む中国側からは七七年に中国隊が登っただけ。市大隊は九〇年、トムール峰に初挑戦した。しかし、第三キャンプ(五、八〇〇)を雪崩が直撃、西堀秀二隊長ら三人が骨がぬえ人となってしまった。

「仲間」の遺志背負い

来月1日出発、8月アタック



吉見 敦司隊員

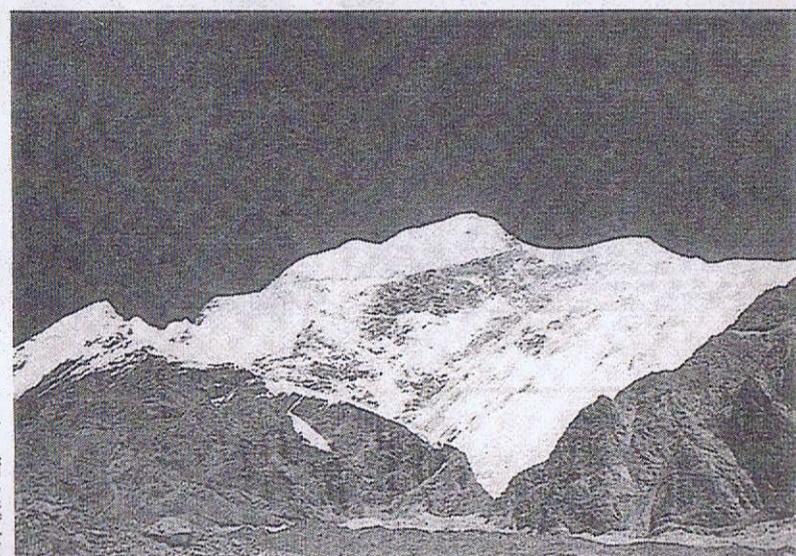
時のメンバー。市大の他の仲間四人を加え九二年、トムール峰に、弔い合戦を挑んだ。だが、今度は第二キャンプが雪崩に襲われ、幸い死者はでなかったものの再び涙をのんでいる。「トムールは、自分たちがいったんかかわった山、悔しい」と吉田隊長。二回



田村 康一隊員

目の登山隊報告書に吉田隊長は「三人の墓標があるトムール。そのトムールにこだわって四年。い

合言葉は「今度こそ」



横浜市大O.B.隊が3度目の挑戦を試みるトムール峰

まだこだわりの消えないうち、田村隊長「この山は、くはなにもする気がおこらなかった。トムールは、自分らにきかざるためにも、通達しなければならぬ。通達しなればならぬ。このため隊員は六月中にパミール高原のムスタグ・アタ峰(七、五四六)に登って体を高度に慣らした後、一気の登頂を狙う。



中央右奥の雲に隠れているのがトムール主峰。アタックベースキャンプ(4350m)からトムール1(4500m)へ向け氷原を下る登山隊の隊員

3度目の挑戦も涙

4日、トムール山脈のトムール山脈に登山隊が到着した。トムール山脈は、ヒマラヤ山脈の南西端に位置し、その最高峰はトムール主峰(4500m)である。登山隊は、アタックベースキャンプ(4350m)からトムール1(4500m)へ向け氷原を下り、登山隊の隊員は、トムール山脈の雄姿を堪能した。トムール山脈は、ヒマラヤ山脈の南西端に位置し、その最高峰はトムール主峰(4500m)である。登山隊は、アタックベースキャンプ(4350m)からトムール1(4500m)へ向け氷原を下り、登山隊の隊員は、トムール山脈の雄姿を堪能した。

横浜市大OB登山隊



ベースキャンプ(3300m)の穴場に設置した1900年登山隊の遺跡プレート。向目に当たる8月12日、ビルを叩いて祈る

はるかなるトムール峰



眠る仲間の遺志引き継ぎ



トムール峰登攀の前に高度順化のために買ったムスタグ・アタ地。手前はキャラバンのラック



トムール山脈の登山隊は、トムール山脈の南西端に位置し、その最高峰はトムール主峰(4500m)である。登山隊は、アタックベースキャンプ(4350m)からトムール1(4500m)へ向け氷原を下り、登山隊の隊員は、トムール山脈の雄姿を堪能した。

協力者名簿

- | | | |
|---------------|-------|-------|
| 浅野段ボール(株) | 岸 順之 | 長尾 忠之 |
| (株)アルメック | 北村 英司 | 中島 満 |
| 神奈川新聞社 | 熊沢 憲 | 中村 隆二 |
| 日本通運(株)横浜航空支店 | 小嶋 健太 | 西掘 玲子 |
| (株)ホーリン | 甲方 裕之 | 平井 幹二 |
| 横浜市立大学探検部 | 小林 均 | 平塚 久裕 |
| 横浜市立大学探検探査の会 | 小島 広海 | 福田 博之 |
| 相木 美香 | 小森 享二 | 藤本 謙治 |
| 石井 泰良 | 今野 陽子 | 堀井 昌子 |
| 石本 潤 | 相良 美成 | 真庭 博之 |
| 井手 洋忠 | 佐々木 仁 | 三浦 茂 |
| 稲田 俊 | 佐藤 修史 | 三浦 潤 |
| 井埜 邦明 | 佐藤 秀宏 | 水尾 寛巳 |
| 梅山 善之 | 神宮 幸一 | 宮本 博明 |
| 大槻 英二 | 鈴木 広視 | 森下 市朗 |
| 大野 正夫 | 高松 康夫 | 山口 幸男 |
| 河合 武臣 | 竹之下勝民 | 山田 勇 |
| 川尻 哲夫 | 常世田泰正 | |

(敬称略、50音順)

編集後記

毎度のことだが、「書きもの」の苦手な私は、編集委員等を任せられても何もしない。自分の指示された範囲の執筆に手いっぱい、他に何もできないのですよ、田村先生。ついでに言えば、この手の作業に才能というセンスのようなものがないんです、吉田には。

編集者田村、助手吉見ということで、いつも何もなくてスイマセン。

さて、今回の報告書の中には、特定個人の名誉を守るための「オフレコ」が多くあったようで、吉田の執筆箇所の言い回しは非常に辛いものがありました。私たち4人の人柄や隊の内部事情を知っていて下さる皆様には、その行間をよみとって頂けるのではないかと思っています。

遠征終了後の94年10月に結婚し、つい先日、不本意ながら第1子が誕生しました……。

これらの障害を乗り越え、また中国へ、新疆へと行きたいものです。

(吉田)

「遠征終了後1年以内に報告書を作成する」のが、計画に協力して下さった方々への礼儀であり、次の行動へのステップにつながると私は常々思っている。

しかし、同じ山への3度目の遠征に失敗したという報告をまとめるのは、正直言って気の進まない作業であった。また、隊員それぞれの生活環境が変化したこともあり、本報告書の発行まで2年近くの月日を要する結果と

なった。この場を借りて、遠征に関わっていた方々にお詫びを申し上げます。

なお、遠征終了後の各隊員の境遇は、以下のように変化した。

吉田は帰国後、無事社会復帰を果たし、休職していた会社に戻った。本人の編集後記にもあるように、結婚、長男誕生等私生活での事件が続き、多忙な毎日を送っている。

吉見は肝炎も治癒し、現在愛知県の山奥にある全寮制のフリースクールで、不登校の子供たちと共に有機農業や養鶏に励んでいる。睡眠時以外は自分の時間が全くもてないほどの激務だそうである。

今では音信不通となった中里であるが、なごに、家業を継ぐため大学を中退して、専門学校に通っているという噂を耳にした。

私田村は、今年の9月に結婚した。帰国後、再就職した会社では、休日出勤もいとわない仕事人間へと変貌し、昔の言動を知る周囲から嘲笑されている。

さて、前回の遠征から2年が過ぎ、そろそろ仕事中心の生活にも嫌気がさしてきた。3度失敗したトムールは長期的な課題として棚上げして、しばらくは気ままに、ヒマラヤやカラコルム、東南アジアの国々等を歩いてみたいと思っている。

(田村)

あれからもう二年が過ぎ、その間私は仕事に就いた。忙しくて、山に登るどころか、そんなことを考える時間的余裕も、精神的余裕もない。だが、たまに「あいつが何処そこに遠征に行くらしい」、「どこかの隊があそこを登った」といった話を耳にすると、悔しさに体が熱くなり、全くふんぎりが付いていない自分に気づく。

誰かと山の話をするのがとてもつらい。自分のなかでギリギリで迎えているものを、迎えきれなくなってしまう。仕事に埋没していく日々の中で、どこか片隅に追いやられているものが急にわき上がってきて、それがどうにもならないことに戸惑い、イラつく。

この報告書を作るにあたって、トムールへの思いを記しておきたかったのだが、結局まとまらない。正直言って、あまり考えたくないのだ。次のことが具体的に考えられないまま、いらだつばかりだ。

トムールに登らない限り、自分が成り立たない。中途半端な自分にけりを付けるために、いろんなことを犠牲にして、いろんなことを積み上げて、しかし何もできずに終わった空しさ、さみしさ……。

三度目にして失敗した理由はいろいろとあるが、最終的にはお互いの甘えだったのではないかと、私は思っている。次を考えると、乗り越えなければならない課題は多いし、三人がまた同じところからスタートするのはとても難しいけれど、私にとっては避けては通れないことである。

いま、純粹にあの山に登りたいと思う。こ

れまでは、いろんな思いが交錯して、押し込めたり、ひっぱったり、なだめたり、ねじふせたりだったが、いまはとても素直でピュアな気持ちだ。これから、仕事や生活、周囲の状況がどう変化するか、全くわからないけれど、その気持ちだけは失わずにいたいと思う。それがなくなったときは、私自身も終わるのだと思う。

トムールは、私に多くのことを与え、教えてくれた。空は変わらず青かったし、美しい草原の花々、素敵なお人たちの出会いと別れ、そして何より、トムールは大きかった。

登れはしなかったけれど、あのすばらしい空間に身を置くことが出来ただけでも、とても幸せなことなのかもしれません。

最後に、この遠征にかかわり、ご協力を頂いた方々に、心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。またいつか、みなさんにお会いできることを願って……。

(吉見)

